

の日女房の中に申し侍りける

右大臣

笛のねの萬代までときこえしを山もこたふるここちせしかな

入道右大臣はじめて中院の家に住み侍りける時

祝の心をよめる

修理大夫顯季

群れてゐるたづのけしきにしるきかな千年すむべき宿の池水

橘俊綱朝臣の伏見の家にかつらをほりうゑさせ

給ひけるによめる

賀茂成助

みづがきの桂をうつすやどなれば月見むことぞ久しかるべき

俊綱朝臣さぬきの守にまかりけるととき祝の心を

よめる

藤原孝善

君が代にくらべていはば松山の松の葉かすはすくなかりけり

後一條院の御時長和五年大嘗會主基方の御屏風

に備中國長田山の麓に琴ひき遊びたる所をよめる

善滋爲政朝臣

千代とのみおなじことをぞしらぶなる長田の山のみねの松風

白河院の御時承保元年大嘗會主基方の稻舂歌神

田の郷をよめる

前中納言匡房

千はやぶる神田の里のいねなれば月日とともに久しかるべし

院の御時の久壽二年大嘗會悠紀方の風俗歌近江

國わか松の森をよめる

宮内卿永範

すべらぎのすゑ榮ゆべきしるしには木だかくぞなる若松の森

平治元年大嘗會悠紀方の風俗歌近江國千坂の浦

をよめる

參議佐憲

君が代のかすにはしかじかぎりなき千坂の浦の眞砂なりとも

同じ御時大嘗會主基方稻春歌丹波國雲田村をよめる

刑部卿範兼

天地あつちのきはめも知らぬみ代なれば雲田の村のいねをこそつめ

高倉院御時仁安三年大嘗會悠紀方の御屏風の歌 宮内卿永範

霜ふれどさかえこそませ君が代にあふさか山のせきの杉むら

今上の御時元暦元年大嘗會悠紀方の風俗の歌三

神山をよめる

藤原季經朝臣

ときはなるみ神のやまの杉むらや八百萬代のしるしなるらむ

千載和歌集 卷第十一

戀歌一

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時初戀の

心をよめる

源俊賴朝臣

難波江の藻うづもに埋うづもるるたまかしはあらはれてだに人をこひばや

二條太皇太后宮肥後

まだしらぬ人をはじめて戀ふるかなおもふ心よ道しるべせよ

前齋宮河内

わりなしや思ふ心の色ならばこれぞそれとも見せましものを

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

に初戀の心をよめる

後二條關白家筑前

思ふよりいつしか濡るるたもとかな涙ぞ戀のしるべなりける

女につかはしける

藤原長能

藻くづ火のいそまを分くる漁船いさりぶねほのかなりしに思ひそめてき

題しらす

輔仁親王

いかにせむ思ひを人にそめながら色にいでじと思ふこころを

徳大寺左大臣

ひとめ見し人はたれたれともしら雲のうはの空なる戀もするかな

中院右大臣

つつめども涙にそでのあらはれて戀すと人にしられぬるかな

大納言成通

つつめどもたへぬ思えいになりぬれば問はず語りのせまほしき哉

百首の歌奉りける時戀こひの歌とてよめる

大炊御門右大臣

おほかたの戀する人にききなれて世のつねのとや君思ふらむ

左京大夫顯輔

思へどもいはでの山に年を経て朽ちやはてなむ谷のうもれ木

高砂のをのへの松にふく風のおとにのみやは聞きわたるべき

待賢門院堀河

荒磯のいはにくだくる波なれやつれなき人にかくるこころは

上西門院兵衛

岩間ゆくやました水をせきわびかれいてもらす心のほどを知らなむ

権中納言俊忠の家の歌合に戀の歌とてよめる 藤原基俊

みこもりに言はでふるやの忍草忍ぶとだにも知らせてしがな

人につかはしける 藤原長能

思ふこといは間にまきし松の種千代とちぎらむ今はねざせよ

うるまの島の人ここにはなたれ来てこの人の

物いふを聞きも知らでなむあるといふ比かへり

事せぬ女につかはしける

前大納言公任

おほつかなうるまの島の人なれやわが言の葉をしらず顔なる

雨のふる日しのびたる人につかはしける

堀河右大臣

人しれずものおもふころの袖見れば雨も涙もわかれざりけり

権中納言としただかつらの家にてなき名たつ戀

といへる心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

たちしより晴れずも物を思ふかななき名や野邊の霞なるらむ

戀の歌とてよめる

源明賢朝臣

歎き餘り知せそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

百首の歌よみ侍りけるとき戀の歌とてよみ侍りける

右大臣

人しれぬ木の葉の下のうもれみづ思ふところをかき流さばや

題しらす

久我内大臣

こひしとも言はぬにぬるる袂かなこころをしるは涙なりけり

從三位頼政

思へどもいはでしのぶのすりごろも心のうちにみだれぬる哉

寂然法師

陸奥のしのぶもぢすり忍びつついろには出でじ亂れもぞする

藤原清輔朝臣

難波女のすくもたく火の下焦れ上はつれなきわが身なりけり

歌合し侍りける時忍戀のこころをよめる

刑部卿頼輔

戀ひ死なば世の果なきにいひなしてなき後までも人にしられじ

顯昭法師

ひとしれぬ涙の川のみなかみやいはでの山のたにのしたみづ

題しらす

讀人しらす

いかにせむ御垣が原につむ芹のねにのみ泣けどしる人のなき

戀の百首の歌よみ侍りける時寄霞戀といへる心

をよめる

賀茂重保

つれもなき人の心やあふ阪のせき路へだつるかすみなるらむ

戀の歌とてよめる

藤原清輔朝臣

涙川うきねのとりとなりぬれど人にはえこそみなれざりけれ

二條院の御時うへのをのこども百首の歌たてまつりける時よめる

源のみちよしの朝臣

我が戀はをばな吹きこす秋風の音にはたてじ身にはしむとも

横川がのふもとなる山寺にこもりけるて侍りける時いとよ

ろしきわらはの侍りければよみて遣しける

仁昭法師

世をいとふはしと思ひし通路にあやなく人を戀ひわたるかな

題しらす

花園左大臣

たよりあらば蟹の釣船ことづてむ人をみるめに求めわびぬと

大宮前太政大臣

またもなくただ一すぢに君を思ふ戀路に迷ふわれやなになる

前中納言伊房

君こふる身はおほ空にあらねども月日をおほく過しつるかな

きさいの宮にはじめてまるりける女房ことひく

を聞かせ給うてよみてたまひける

二條院御製

ことの音にかよひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれどわが身もい

百首の歌よみ給侍リひける時戀の歌 式子内親王

はかなしや枕さだめぬうたた寐にほのかにまよふゆめの通路

百首歌よみ侍りけるとき戀の心をよみはべり

ける 右大臣

さきにたつ涙とならば人しれず戀路にまどふみちしるべせよ

題しらす 刑部卿頼輔

ながらへばつらき心も變るやとさだめなき世を頼むばかりぞ

源有房

もらさばや忍びはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりは

源師光

戀しさを憂身なりとてつつみしはいつまでありし心なるらむ

藤原惟規

頼めとやいなとやいかにいな舟の暫しと待ちし程も經にけり

賢智法師

かくばかり色に出でじと忍べども見ゆらむ物をたへぬ氣色は

賀茂重保

夏にいりて戀まさるといへる心をよめる

題しらす 津守國光

日を経つつしけさはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

大中臣濟文

おつれども軒にしられぬ玉水は戀のながめのしづくなりけり

源季貞

ひとしれずおもひそめてし心こそいまは涙のいろとなりけれ

いろ見えぬこころのほどを知らずは袂を染むる涙なりけり
祐盛法師

わが床は信夫の奥のますけ原つゆかかるとも知るひとのなき
大中臣定雅

君こふる涙しぐれと降りぬればしのぶのやまも色づきにけり
祝部宿禰成仲

いかにせむ忍ぶの山のした紅葉しぐるるままに色のまさるを
一一條院前皇后宮常陸

いつしかと袖に時雨のそそぐかな思ひは冬のはじめならねど
賀茂重延

攝政右大臣の時百首の歌の中に忍戀の心をよみ
侍りける
從三位頼政

あさましやおさふる袖の下くぐる涙のすゑをひとや見つらむ

皇嘉門院別當

忍びねの袂は色に出でにけりこころにも似ぬわがなみだかな

女のなき名たつよし恨みて侍りければ遣しける
左兵衛督隆房

同じくば重ねてしほれぬれ衣さてもほすべきなき名ならじを

かへし
讀人しらす

流れてもすすぎやするとぬれ衣人はきすとも身にはならさじ

戀の歌とてよみ侍りける
大納言宗家

人目をばつつむと思ふにせきかねて袖にあまるは涙なりけり

右京大夫季能

つれなさにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別なりけれ

法眼實快

よそ人にとはれぬるかな君にこそ見せばやとおもふ袖の雫を

藤原伊綱

つれなくぞ夢にも見ゆるさよ衣うらみむとては返しやはせし

攝政右大臣の時家の歌合に戀の歌とてよめる 藤原季經朝臣

思ひ出づるその慰めもありなまし逢ひ見て後のつらさ思へば

おなじ家に百首の歌よみ侍りける時初戀の心を

よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

照射する端山がすそのした露やいるより袖はかくしをるらむ

忍戀

いかにせむ室の八島にやどもがな戀のけぶりを空にまがへむ

千載和歌集 卷第十二

戀歌一

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよみ

侍りける

大納言公實

思ひあまり人にとはばや水無瀬川むすばぬ水に袖はぬるやと

題しらす

花園左大臣

はかなくも人に心をつくすかな身のためにこそ思ひそめしか

二條太皇太后宮大貳

戀ひそめし人はかくこそつれなけれ我が涙しも色かはるらむ

白河院三條殿におはしましける時をのこども戀

の歌よみ侍りけるによめる

前中納言雅兼

かかりける涙と人も見るばかりしほらじ袖よ朽ちはてねただ

權中納言俊忠家に戀の十首の歌よみ侍りける時

いのれども不逢戀といへる心を

源俊頼朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしよ烈しかれとは祈らぬものを

おなじ十首の中に誓ふ戀といへる心をよめる

修理大夫顯季

うれしくは後の心を神もきけ引くしめなはの絶えじとぞ思ふ

乍臥無實戀

藤原顯仲朝臣

結びおくふしみのさとの草枕とけで止みぬる戀にもあるかな

來不留戀

權中納言俊忠

戀ひ戀ひてかひもなぎさに沖つ波よせては臆て立ち歸れとや

女につかはしける

徳大寺左大臣

いかで我がつれなき人に身をかへて戀しき程を思ひしらせむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に戀の心をよめる

源 雅 光

玉藻かる野島の浦のあまだにもいとかく袖は濡るるものかは

藤 原 重 基

あふことをその年月とちぎらねば命やこひのかぎりなるらむ

中院入道右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけ

るに戀の歌とてよめる

藤原宗兼朝臣

戀ひわたる涙の川に身をなけむこの世ならでも逢瀬ありやと

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる

前 参 議 親 隆

陸奥の十綱のはしにくるつなの絶えずも人にいひわたるかな

逐日増戀といへる心をよませ給ひける

院 御 製

戀ひわぶる^{たい}今日の涙にくらぶればきのふの袖はぬれし數かは

題しらす

右大臣

朝まだき露をさながら笹めかる賤がそでだにかくは濡れ^{しなれじ}じを

權大納言實國

潮たるるいせをの蟹や我ならむさらばみるめをかる由もがな

權大納言實家

よしさらば逢ふとみつるに慰まむさむる^{うつつ}現もゆめならぬかは

右衛門督頼實

いかばかり思ふと知りてつらからむあはれ涙の色を見せばや

俊惠法師

戀ひしなむ命を誰にゆづり置きてつれなき人の果をみせまし

從三位頼政

せきかぬる涙の川の早き瀬は逢ふよりほかのしがらみぞなき

藤原顯方

我が戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守

道因法師

なれてのちしなむ別のかなしきに命^{をい}にかへぬ逢ふこともがな

賀茂重保

錦木のちつかに限なかりせばなほこりすまに立てましものを

前參議教長

いかばかり戀路は遠きものなれば年^なはゆけども逢瀬なからむ

時々物申しかはしける人に名^{なき名}のたつは知らぬか

三のみこの家越後

なれて後つらからましにくらぶればなき名は事の數ならぬ哉

大納言しけみち少將に侍りける時名の立つこと
侍りけるをおなじくば誠になさばやといひ遣し
てければよみて遣しける

法性寺入道前太政大臣家參河

逢ひ見むとおもひなよりそ白波の立ちけむ名だに惜しき汀を

後三條内大臣家に歌合し侍りける時戀の歌とて

道因法師

よめる
戀ひしなむ身は惜からず逢ふ事にかへむ程までと思ふばかりぞ

贈左大臣長實八條の家にて戀の心をよめる
左京大夫顯輔

今はさは逢ひ見むまではかたくとも命とならむ言の葉もがな

題しらす
平忠盛朝臣

ひとかたになびく藻鹽の烟かなつれなき人のかからましかば

藤原通經

戀ひわびぬちぬの壯夫ましらをならなくに生田の川に身をやなけまし

寂超法師

命をばあふにかへむと思ひしを戀ひ死ぬとだに知せてしがな

源師光

戀しともまたつらしとも思ひやる心いづれかさきにたつらむ

道因法師

逢ふならぬ戀慰めのあらばこそつれなしこても思ひたえなめ

顯昭法師

つれなさに今は思ひもたえなましこの世ひとつの契なりせば

源慶法師

うたたねの夢に逢ひ見て後よりは人もたのめぬ暮ぞまたるる

朝恵イ法師

あはれとも枕ばかりやおもふらむ涙たえせぬ夜半のけしきを

忍戀のころをよみ侍りける 二條院内侍參河

ころも手におつる涙のいろなくば露とも人にいはましものを

般富門院大輔

思ふこそ忍ぶにいこど添ふものはかずならぬ身の嘆なりけり

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りける時戀の

攝政前右大臣

行きかへる心に人のなるればやあひ見ぬさきに戀しかるらむ

寄郷戀といへる心をよめる 左衛門督家通

あふ事をさりとともとのみ思ふかな伏見の里の名をたのみつつ

忍びて暮にまうのほるべきよし侍りける人につ

二條院御製

かはしける

など^{ぞイ}やかくさも暮れ難き大空ぞ我が待つ事はありとしらすや

百首の歌の中に戀のころを 式子内親王

袖のいろは人のとふまでなりもせよふかき思を君したのまば

契暮秋戀といへる心をよみ侍りける 左近中將良經

あきはをし契は待たるとにかくに心にかかるくれのそらかな

戀の歌とてよめる 藤原成家朝臣

戀をのみしぐるるそらの浮雲はくもりもあへず袖ぬらしけり

忍傳書戀といへる心をよめる 藤原家實

磯がくれかきはやれども藻鹽草たちくる波にあらはれやせむ

題しらす 藤原家隆

くれにとも契りてたれか歸るらむ思ひたえたるあけほの空

讀人しらす

契りおく其言の葉に身をかへて後の世にだに逢ひ見てしがな

大内にて月あかかりける夜人々あそびけるをほ

のかにみて心あくがるるよしいひて侍りける人

の返事につかはしける

殷富門院尾張

誰ゆゑかあくがれにけむ雲間より見し月影はひとりならじを

戀爲後世妨といへる心をよめる

藤原家基

こえやらで戀路にまよふ逢坂や世を出ではてぬ關となるらむ

乍臥無實戀といへる心をよめる

西住法師

たまくらの上にみだるる朝寐髪したにとけずと人は知らじな

題しらす

從三位頼政

我が袖のしほのみちひる浦ならば涙のよらぬをりもあらまし

法印靜賢

潮たるる袖のひるまはありやともあはでの浦の蟹にとはばや

俊惠法師

思ひきや夢をこの世のちぎりにて覺むる別をなけくべしとは

藤原隆信朝臣

我ゆゑの涙とこれをよそに見ばあはれなるべき袖のうへかな

賀茂政平

逢ふことのかくかたければつれもなき人の心や岩木なるらむ

源光行

こひ死なむ涙のはてやわたり川深きながれとならむとすらむ

寄石戀といへる心を

二條院讃岐

我が袖は汐干に見えぬ沖の石のひとこそ知らね乾くまもなし

題しらす

民部卿成範

かかりける歎は何のむくいぞと知る人あらば問はましものを

太宰大貳重家

戀ひ死なむことぞはかなき渡川逢瀬ありとは聞かぬものゆゑ

刑部卿範兼

妹が邊あたながるる川の瀬によらば泡となりても消えむとぞ思ふ

石清水の歌合とて人々よみ侍りける時寄松戀と

いへる心をよみ侍りける

權中納言經房

はかなしな心つくしにとしをへていつとも知らぬあふの松原

戀の歌とてよめる

寂蓮法師

思寐の夢だに見えて明けぬれば逢はでも鳥の音こそつらけれ

俊惠法師

夜もすがら物思ふ頃は明けやらぬ閨の隙さへつれなかりけり

いたづらにしをるる袖をあさ露にかへる袂とおもはましかば

菅原是忠

戀ゆるはさもあらぬ人ぞ恨しき我よそならばとはましものを

藤原親盛

思ひせく心のうちのしがらみも堪はいへずなりゆくゆるなみだ川かな

靜縁法師

おのづからつらき心もかはるやと待ち見むほどの命ともがな

むつましくもいはならで忘くていられにける人に遣しける 大江維順がむすめ

忘らるるうき名はさても立ちにけり心のうちは思ひわけども

晚風催戀といへる心をよめる 藤原顯家朝臣

よとともにつれなき人を戀草のつゆこほれ増す秋のゆふかぜ

題しらす 源師光

戀しさをいかがはすべし思へども身は數ならず人はつれなし

女のもとに遣しける

權大納言實國

戀ひしなば我故とだに思ひ出でよさこそはつらき心なりとも

左衛門督家通

一向に恨みしもせじさきの世にあふまでこそは契らざりけめ

思ひながら色には出でざりけるを女のもとにて

藤原公衡朝臣

増鏡こころもうつるものならばさりとも今はあはれとや見む

法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心

權中納言通親

いましばしそらだのめにも慰めで思ひたえぬる宵のたまづさ

藤原盛方朝臣

杣川の淺からずこそ契りしかなどこのくれをひきたがふらむ

皇太后宮大夫俊成

思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜も同じまるねせむとは

千載和歌集 卷第十三

戀歌三

題しらす

藤原實方朝臣

契りこし事の違ふぞたのもしきつらさもかくや變ると思へば

相模

知らじかしおもひも出でぬ心にはかく忘れずわれ^が嘆くとも

藤原長能

つれもなくなりぬる人の玉章^{たまづき}をうき思ひ出のかたみともせじ

やはらかに寐^ねる夜もなくて別れぬる夜々の手枕いつか忘れむ

ふん月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍りける

千載和歌集 卷第十三

戀歌三

題しらす

藤原實方朝臣

契りこし事の違ふぞたのもしきつらさもかくや變ると思へば

相模

知らじかしおもひも出でぬ心にはかく忘れずわれ^が嘆くとも

藤原長能

つれもなくなりぬる人の玉章^{たまづき}をうき思ひ出のかたみともせじ

やはらかに寐^ねる夜もなくて別れぬる夜々の手枕いつか忘れむ

ふん月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍りける

を又の目心あるさまに人のいひ侍りければ遣し

小大君

柵機にかしつと思ひしあふ事をその夜なき名の立ちにける哉

びほどのの皇太后宮にまるりて侍りけるに辨の

めのとのはかまのこしのいでたるを御まへなる

硯を引きよせてそのこしに書きつけ侍りける 宇治前太政大臣

うらめしやむすほほれたる下ひものとけぬや何の心なるらむ

かへし 辨のめのと

下紐は人の戀ふるにとくなれば誰がつらきとか結ほほるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよめ

大納言公實

ひとり寐^ひるわれにて知りぬ池水につがはぬをしのおもふ心を

戀をのみしづのをだまきくるしきは逢はで年ふる思なりけり
中納言師時

麻手ほすあづまをとめの萱筵かやせしろしきしのびても過ぐすころかな
源俊頼朝臣

中院の右大臣中將に侍りける時歌合し侍りける
修理大夫顯季

よとともに行く方もなき心かな戀は道なきものにぞありける
僧都覺雅

旅衣なみだのいろのしるければ露にもえこそかこたざりけれ
堀河院の御時艶書の歌をうへのをのこどもによ

ませさせ給ひて歌よむ女房のもとに遣しけるを
大納言公實は康資の王の母に遣しけるを又周防

の内侍にも遣したりけると聞きてそねみたる歌を送
りて侍りければ遣しける
大納言公實

みつ潮の末葉をあらふみだいながれ芦の君をぞ思ふうきしづみつみしづみみ
中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とて
權中納言俊忠

我が戀はあまのかる藻にみだれつつ乾くときなき波のした草
法性寺入道内大臣に侍りける時の歌合に尋失戀
藤原時昌

といへる心をよめる
なほざりに三輪の杉とは教へおきて尋ぬる時はあはぬ君かな

法性寺殿にて五月の御供花の時をのこども歌よ
み侍りけるに契後隱戀といへる心をよみ侍りけ

る
皇太后宮大夫俊成

たのめこし野邊の道芝夏ふかしいづくなるらむもすの草くき

題しらす

法性寺入道前太政大臣

冬の日を春よりながくなすものは戀ひつつくらす心なりけり

位の御とき皇太后宮はじめてまるり給へりける

院 御 製

萬世を契りそめつるしるしにはかつがつ今日の暮ぞひさしき

おなじ御時忍びてはじめてまうのほりて侍りけ

る人に朝まつりごとの程まぎれさせ給ふことあ

りて暮れにける夕つ方つかはされける

今朝とはぬつらさに物は思ひしれ我もさこそは恨みかねしか

花園左大臣につかはしける 待賢門院加賀

かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる歎きせむとは

百首の歌奉りける時戀の心をよめる 前 參 議 教 長

戀しさは逢ふを限と聞きしかどさてしもいとど思ひそひけり

左京大夫顯輔

よそにしてもどきし人にいつしかと袖の雫をとはるべきかな

待賢門院堀河

長からむ心もしらす黒髪のみだれて今朝はものをこそおもへ

上西門院兵衛

宵のまもまつに心やなぐさむと今來むとだにたのめおかなむ

待賢門院安藝

磯馴木のそなれそなれてむす昔のまほならずとも逢ひ見てしがな

從 三 位 賴 政

人はいさあかぬ夜床にとどめつる我が心こそわれを待つらめ

忍びたる所にまかりて有明の月に夜ふかく歸り
てつかはしける

權中納言通親

思へただ入りやらざりしありあけの月よりさきにいでし心を

攝政右大臣の時家の歌合に旅宿逢戀といへる心

をよめる

皇嘉門院別當

難波江の葦のかりねの一よ故みをつくしてや戀ひわたるべき

初逢戀の心をよめる

藤原公衡朝臣

戀ひ戀ひてあふ嬉しさをつつむべき袖は涙にくちはてにけり

藤原隆信朝臣

君やそれありしつらさはたれなれば恨みけるさへ今は悔しがるむい悔しき

夢中契戀といへる心をよめる

參議俊憲

すがたこそ寐覺の床に見えずとも契りし事のうつつなりせば

中納言國信しのびて物申して後つかはしける 前齋院新肥前

あづまやのあさきの柱我ながらいつふしなれて戀しかるらむ

寄枕戀といへる心をよみ侍りける

久我内大臣

つつめども枕はこひを知りぬらむ涙かからぬ夜半しなければ

夏の戀の心をよめる

前中納言雅頼

戀すればもゆる螢もなく蟬もわが身のほかのものとはは見る

題しらす

右大臣

引きかけて涙を人に包むまにうらや朽ちなむ夜半のころもは

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる

前參議親隆

潮たるる伊勢をの蜚の袖だにもほすなる隙ひまはありとこそ聞け

歌合し侍りける時よめる

藤原清輔朝臣

しばしこそ濡るる袂もしほりしか涙にいまはまかせてぞ見る

よしさらば涙にくちねからころもほすも人目を忍ぶかぎりぞ
顯昭法師

題しらす
道因法師

おもひわびさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

藤原仲實朝臣備中守にまかれりけるとき具して

くだりたりけるを思ひうすくなりて後月をみて

よみ侍りける
遊女戸々

數ならぬ身にも心のありがほにひとりも月をながめつるかな

契日中戀といへる心をよめる
中原清重

涙にや朽ちはてなましから衣そでのひるまとたのめざりせば

烏羽院御時藏人所に侍りけるととき女にかはりて

よめる
藤原或親

かれはつる小笹がふしを思ふにも少なかりけるよよの數かな

寄催馬樂戀といへる心をよめる
藤原伊經

分けきつる小笹が露のしけければ逢ふ道にさへぬるる袖かな

旅戀といへる心をよめる
讀人しらす

おきて行く涙のかかるくさまくら露しけしとや人のあやめむ

月前戀といへる心を

涙をもしのぶるころのわが袖にあやなく月のやどりぬるかな

稱他人戀といへる心をよみ侍りける
内大臣

しのびかね今は我とやなのらまし思ひ捨つべき氣色ならねば

左近中將良經

知られても厭はれぬべき身ならずば名をさへ人に包まましやは

女に忍びてかたらふこと侍りけるを聞ゆること

の侍りければ遣しける

左近衛督隆房

いづくより吹きくる風の散らしけむ誰もしのぶの森の言の葉

題しらす

從三位頼政

思ひかね夢に見ゆやとかへさずば裏さへそでは濡さざらまし

源師光

くり返しくやしきものは君にしもおもひよりけむ賤のをだ卷

藤原隆親

いとほるる身をうし^{らみ}とてや心さへ我をはなれて君にそふらむ

源光行

あぢきなくいはで心をつくすかなつつむ人目も人のためかは

皇太后宮若水

くれなるに萎れし袖も朽ちはてぬあらばや人に色もみすべき

皇嘉門院尾張

命こそおのが物からうかりけれあればぞ人をつらしとも見る

契る事侍りけるを忘れたる女につかはしける 右近中將忠良

何とかやしのぶにはあらで故郷の軒端にしける草の名ぞうき

夢中契戀といへる心をよめる 太皇太后宮小侍從

見し夢の覺めぬやがての現にて今日と頼めしくれを待たばや

人につかはしける 二條院御製

知るらめや落つる涙の露ともにわかれの床^しにきえて戀ふとは

御返事 讀人しらす

まだしらぬ露おく袖を思ひやれかごとばかりの床のなみだに

右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りける時

後朝の歌とてよみ侍りける 攝政前右大臣

かへりつるなごりの空をながむればなぐさめがたき有明の月
 皇太后宮大夫俊成
 忘るなよ世々の契をすがはらやふし見の里のありあけのそら

千載和歌集 卷第十四

戀歌四

題しらす

和泉式部

如何にしてよるの心をなぐさめむ晝はながめにさても暮しつ
 これもみなさぞな昔の契ぞとおもふものからあさましきかな

昔御らんじける人たいの近き程にわたりける由きか

せ給うてつかはしける

花山院御製

よそにては中々さてもありにしをうたて物思ふ昨日今日かな
 久しくまうで來ざりける人のおとづれたりける
 返事につかはしける

小式部

思ひ出でてたれをか人のたづねまし憂にたへたる命ならずば

太宰帥敦道のみこ中たえ侍りけるころ秋つかた

思ひ出でてもの^{まを}して侍りけるによみ侍りける 和泉式部

待つ^いともかばかりこそは有らましか思ひもかけぬ秋の夕暮

題しらす

ほどふれば人は忘れてやみぬ^{れど}らむ契りしことを猶たのむかな

女のもとより夜ふかく歸りてつかはしける 藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

堀河院御時百首の歌奉りける時戀の心をよめる 藤原基俊

木のまより領巾^ひ振る袖を外^{よそ}に見ていかがはすべき松浦さよ姫

藤原仲實朝臣

まぶしさす賤男の身にもたへかねて鳩ふく秋の聲たてつなり

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時の家

にて寄花戀といへる心をよめる 源雅光

吹く風にたへぬこすゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり

逢不逢戀といへる心をよみ侍りける 大納言成通

あひみむといひ渡りしは行末の物思ふ事のはしにぞありける

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

に戀の歌とてよめる 伊豫三位

戀ひわびてあはれとばかりうち歎く事よりほかの慰^{なぐさ}めぞなき

おなじ家に十首の戀の歌よみ侍りけるとき來不

留戀といへる心をよみ侍りける 權中納言師時

たちかへる人をも何かうらみまし戀しさをだに留めざりせば

藤原道經

うづら鳴くしづやに生ふる玉小管かりにのみ來て歸る君かな
 たえて後のかたみといへる心をよみ侍りける 久我内大臣
 わかれてはかたみなりける玉章を慰むばかり書きもおかせで
 崇徳院に百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる 上西門院兵衛
 わが袖の涙やにほのうみならむかりにも人をみるめなければ

前參議親隆

あづまやのをがやの軒の忍草しのびもあへずしけるおもひに

皇太后宮大夫俊成

戀をのみしかまの市にたつ民のたへぬ思ひに身をやかへてむ

待賢門院安藝

戀をのみすがたの池に水草^{みくさ}るてすまでやみなむ名こそ惜しけれ

藤原清輔朝臣

露ふかきあさまの野邊^{らゐ}にをかや刈る賤が袂もかくは濡れじを
 逢ふ事は引^ひ佐細江の^みをつくし深きしるしもなき世なりけり
 百首の歌よみける時戀の歌とてよめる 顯昭法師
 人づてはさしもやはともおもふらむ見せばや君になれる姿を
 女のかよふ人あまたきこゆるに遣しける 平實重
 淺ましさのみはいかに信濃^{がい}なる木曾路の橋のかけ渡るらむ
 題しらす
 人の上と思はばいかにもどかましつらきも知らず戀ふる心を
 契りける事たがひにける女に遣しける 參議爲通
 契りしももろともにこそ契りしか忘れればわれも忘れましかば
 忍びて物いひ侍りける女の常に心ざしなしとゑ
 んじければ遣しける 從三位季行

君にのみしたのおもひはかはしまのみづの心は浅からなくに

うへのをのこども老後戀といへる心をつかうま

つりけるによませ給うける

院 御 製

おもひきや年のつもるはわすられて戀に命のたえむものとは

題しらす

藤原季通朝臣

歎きあまりうき身ぞ今はなつかしき君ゆゑ物を思ふと思へば

從三位頼政

水莖はこれをかぎりとかきつめてせきあへぬ物は涙なりけり

むつきのついたちごろ忍びたる所に遣しける

二條院御製

たれもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそおとしはじむれ

御返事

讀人しらす

鶯はなべてみやこになれぬらむ古巢に音をばわれのみぞなく

寄源氏物語戀と云ふ心をよみ侍りける

見せばやな露のゆかりの玉かつら心にかけてしのぶけしきを

逢坂の名を忘れにし中なれどせきやられぬはなみだなりけり

二條院の御時うへのをのこども百首の歌奉りけ

る時忍戀の心をよめる

刑部卿範兼

月まつと人には言ひてながむれば慰めがたきゆふぐれのそら

題しらす

藤原爲實

蘆の屋のかりそめ臥は津の國のながらへ行けど忘れざりけり

圓位法師

知らざりきくもるのよそに見し月の影を袂にやどすべしとは

逢ふと見し其夜の夢のさめであれな永き眠はうかるべけれど

空人法師

秋風のうき人よりもつらきかな戀せよとては吹かざらめども

源 仲 綱

心さへ我にもあらずなりにけり戀はすがたのかはるのみかは

寄浦戀といへる心をよめる 二條院内侍參河

待ちかねて小夜もふけひの浦風にたのめぬ波の音のみぞする

戀の歌とてよめる 讚 岐

一夜とて夜がれし床のさむしろにやがても塵の積りぬるかな

百首の歌よませ侍りける時遇不逢戀の心をよみ 攝政前右大臣

侍りける ながらへてかはる心を見るよりは逢ふに命をかへてましかば

在所不言戀といへる心をよみ侍りける 前中納言雅頼

逢ふ事のありしところし變らずば心をだにもやらましものを

移香増戀といへる心をよみ侍りける 權中納言經房

うつり香に何しみにけむ小夜衣忘れぬつまとなりけるものを

あけぐれの空をとみに眺めける女また逢ふまで

のかたみに見むと申しける後遣しける 右近中將忠良

忘れぬや忍ぶやいかに逢はぬ間の形見とききしあけぐれの空

歌合し侍りける時戀の歌とてよめる 俊 惠 法 師

おもひかねなほ戀路にぞかへりぬる恨は末もとほらざりけり

見せばやな雄島の蜚の袖だにも濡れにぞぬれし色はかはらず 殷富門院大輔

隔川戀といへる心をよめる 從三位頼政

山城のみつのの里にいもをおきて幾たびよどに船よばふらむ

絶久戀といへる心をよみ侍りける 藤原隆信朝臣

人しれずむすびそめてし若草の花のさかりも過ぎやしぬらむ

稀會不絶戀

藤原顯家朝臣

いかなれば流はたえぬ中川に逢ふ瀬のかすのすくなかるらむ

攝政右大臣の時百首の歌よませ侍りける時遇不

逢戀をよめる

源 仲 綱

すみなれしさの中川瀬だえしてながれかはるは涙なりけり

初疎後思戀といへる心をよめる

一條院讃岐

今さらに戀しといふもたのまれずこれも心のかはると思へば

戀の歌とてよめる

太皇太后宮小侍從

戀ひそめし心のいろのなになれば思ひかへすに返らざるらむ

戀の歌とてよめる

道 因 法 師

伊勢島やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖は濡るる物かは

遇不逢戀といへる心をよめる

俊 惠 法 師

思ひきやうかりし夜半の雞こりの音をまつ事にして明すべしとは

夏夜戀といへる心をよめる

唐衣かへしては寐じなつの夜は夢にもあかでひとわかれけり

戀の歌とてよみ侍りける

法 印 靜 賢

身のうさを思ひしらでや止みなまし逢ひ見ぬ先のつらなりせば

攝政右大臣の時家の歌合に戀の心をよみ侍りけ

る

皇太后宮大夫俊成

逢ふ事は身をかへてとも待つべきによよを隔てむ程ぞ悲久しき

逢ふ事は身をかへてとも待つべきによよを隔てむ程ぞ悲久しき

攝政家丹後

おもひねの夢に慰むこひなれば逢はねど暮のそらの待ぞたるる

題しらす

民部卿成範

戀ひ佗びてうちぬる宵の夢にだに逢ふとは人の見えばこそあらめ

忍びて物申し侍りける女のせうそこをだに通は

しがたく侍りけるをからの枕のしたに師子つく

りたるが口のうちに深くかくしてつかはし侍り

ける

權大納言實家

佗びつつはなれだに君が床なれよかはさぬ夜半の枕なりとも

かへし

讀人しらす

歎きつつかはさぬ夜半のつもるには枕もうとくならぬ物かは

題しらす

左近中將忠良

これはみな思ひし事ぞ馴れしより哀なげきなごりを如何にせむとは

權中納言通親

死ぬとても心をわくるものならば君に残してなほや戀ひまし

千載和歌集 卷第十五

戀歌五

題しらす

相 模

假寐うたたねに果はなくさめし夢をだにこの世にまたは見でや止みなむ

和 泉 式 部

ねをなけば袖に朽ちてもうせぬめり猶憂き事ぞつきせざりける

ともかくも言はばなべてになりぬべし音ひにになきてこそ見すべかりけれ

有明の月見すさみておきていにし人の名残をながめしものを

紫 式 部

忘るるは憂世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞ佗悲しき

左大將朝光がちかごとぶみを書きてかはりおこ
せよと責めはべりければ遣しける

馬内侍

ちはやぶる賀茂の社の神もきけ君わすれずばわれもわすれじ
かたらひける人の久しく音づれざりければ遣し

大貳三位

うたがひし命ばかりはありながら契りし中のたえぬべきかな

もとしりて侍りける男のこと人に物申すと聞き

相模

てふみ遣したりければいひ遣しける

かり人はとがめもやせむ草茂みあやしき鳥のあとのみだれを

女のふかき山にも入らまほしきよしいひて侍り
ければ遣しける

山よりもふかきところをたづね見ば我が心にぞ人はいるべき

大納言ただのぶ

時々物申しける女のもとに文を遣したりけるを

藤原つねひら

よもあらじとて返して侍りければ遣しける

いにしへもこえ見てしかば逢坂はふみたがふべき中の道かは

むすめのもとに通ふ男の狩になむまかるとて太

刀をこひにおこせて侍りければ女にかはりて遣

赤染衛門

しける

かりにぞといはぬ先より頼まれずたちとまるべき心ならねば

藤原基俊

中納言國信の家の歌合に戀の心をよめる

人心なにをたのみて水無瀬川せぜのふるぐひ朽ちはてぬらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき恨の心をよ

隆源法師

める

恨みずば忘れぬ人もありなまし思ひしらでぞあるべかりける

花園左大臣の家に侍りける女にまだ中納言など
申しける頃物申し渡りけるをかれがれになり
ければ思ひたえにけむ前山城守なりけるもの
物申すと聞きていひ遣しける

中院右大臣

まことにやみとせも待たで山城のふしみのさとにひ枕する
かくいひて侍りければあやなくかの男にあはずなむなりに
けるとなむ

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる

待賢門院堀河

うき人をしのぶべしとは思ひきや我が心さへなどかはるらむ

上西院兵衛

うかりける世々の契をおもふにもつらきはいまの心のみかは

前參議親隆

知るなればいかに枕のおもふらむ塵のみつもる床のけしきを

題しらす

右大臣

はかなくもこむ世を^{れい}かけて契るかな二度^{ふたたび}同じ身ともならじを

右近中將忠良

思ひ出でよ夕の雲もたなびかばこれや歎きにたへぬけぶりと

左兵衛督隆房

戀ひ死なばうかれむ魂よ^{しほし}暫だに我が思ふ人のつまにとどまれ

太皇太后宮小侍從

君こふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまに結ばれぬらむ

二條院讚岐

きみ戀ふる心の闇をわびつつはこの世ばかりと思はましかば

殷富門院大輔

變りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな

俊 惠 法師

君やあらぬ我が身やあらぬおほつかな頼めし事の皆變りぬる

圓 位 法師

物おもへどかからぬ人もある物をあはれなりける身の契かな

月前戀といへる心をよめる

なけけとて月やはものを思はするかこちがほなる我が涙かな

寂 超 法師

久方の月ゆるゑにやは戀ひそめしながむればまづ濡るる袖かな

戀の歌とてよめる

祐 盛 法師

つらしとも恨むる方ぞなかりける憂きを厭ふは君ひとりかは

藤 原 隆 親

思ひしる心のなきをなけくかなうき身ゆるゑこそ人もつらけれ

源 有 房

思ふをも忘るる人はさもあらばあれ憂きを忍ばぬ心ともがな

惟 宗 廣 言

はかなくぞ後の世までと契りけるまだきにだにもかはる心を

源 仲 頼

厭はるるその由縁にていかなれば戀は我が身を離れざるらむ

鴨 長 明

思ひあまりうち寐る宵の幻影も波路を分けて行きかよひけり

たえて久しくなりにけるをこそ思ひ出でて今よ

りはあだなる心あらじなど言ひければ遣しける 土御門前齋院中將

年ふれど憂身は更にかはらじをつらさも同じつらさなるらむ

百首の歌めしける時戀の歌とてよませ給ひける 崇徳院御製
なけくまに鏡の影もおとろへぬ契りしことのかはるのみかは

左京大夫顯輔

年ふれどあはれにたえぬ涙かなこひしき人のかからましかば

藤原季通朝臣

今はただおさふる袖も朽ちはてて心のままに落つるなみだか

皇太后宮大夫俊成

奥山の岩がきぬまのうきぬなは深きこひぢになにみだれけむ

敷きしのぶ床だにたへぬ涙にも戀はくちせぬ物にぞありける

藤原清輔朝臣

朝夕にみるめをかづく蟹だにもうらみはたえぬ物とこそきけ

上西門院兵衛

何せむに空だのめとて恨みけむ思ひたえたるぬいくれもありけり

般富門院大輔

戀の歌とてよめるかとい
なほざりの空だのめとて待ちし夜の苦しかりしぞ今は戀しき

攝政右大臣

題しらず
をしみかねけに言ひしらぬ別かな月もいまかひなしはのありあけの空

右近大將實房

戀ひわぶる心はそらにうきぬれど涙のそこに身はしづむかな

前中納言雅頼

隔關路戀といへる心をよめる
思ひかね越ゆる關路に夜をふかみ八聲の鳥に音をぞそへつる

權中納言通親

九月つごもりに女につかはしける
世にしらぬ秋のわかれにうち添へて人やりならず物ぞ悲しき

藤原經家朝臣

戀の歌とてよめる

契りしにあらずなるとの濱千鳥跡だに見せぬうらみをぞする

藤原定家

しかばかり契りし中も變りけるこの世に人をたのみけるかな

顯昭法師

秋夜戀といへる心をよめる

秋の夜をも思ふ事のかぎりとはひとり寐ざめの枕にぞしる

前參議教長

十首の歌人のよませ侍りける時よめる

よしさらば君に心はつくしてむまたもこひしき人もこそあれ

暮戀故人といへる心を

仁和寺後入道法親王覺性

なき人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞくやしかりける

題しらす

源俊賴朝臣

これを見よ六田ちだのよどにさでさしてしをれししづの麻衣かは

筐めかるあれ田の澤にたつ民も身のためにこそ袖もぬるらめ

馬内侍

筐の葉に霰ふる夜の寒けきにひとりは寐なむものとやは思ふ

和泉式部

うらむべき心ばかりはある物をなきになしても訪はぬ君かな

千載和歌集 卷第十六

雑歌上

上東門院より六十賀おこなひ給ひける時よみ侍
りける

法成寺入道前太政大臣

かぞへしる人なかりせばおく山のたにの松とや年をつままし

上東門院入内の時御屏風に松ある家に笛ふきあ

そびしたる人ある所をよみ侍りける

大納言 齊信

笛竹のよふかき聲ぞきこゆなる峰のまつかぜ吹きやそふらむ

一條院の御時皇后宮五節奉られける時辰の日か

しづき十二人わらは下づかへまで青摺をなむ著

せられたりけるに兵衛といふが赤紐のとけたり
けるをこれ結ばばやといふをききて中將實方朝
臣よりてつくろふとて足びきの山井の水はこほ
れるを如何なるひものとするなるらむと言ふを
聞きて返事によみ侍りける

皇后宮清少納言

うは氷あはに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりぞ

十二月ばかりに門をたたきかねてなむ歸りにし

と恨みたりける男としかへりて門はあきぬらむ

やといひて侍りければ遣しける

上東門院紫式部

たが里の春のたよりにうぐひすの霞にとづるやどを訪ふらむ

藤原實方朝臣のとのる所にもろともに臥して曉

かへりて朝につかはしける

藤原道信朝臣

いもと寐ておきゆく朝の道よりもなかなか物の思はしきかな

二月ばかり月のあかき夜二條院にて人々あまた

るあかして物語などし侍りけるに内侍周防より

ふして枕をがなと忍びやかにいふを聞きて大納

言忠家はを枕にとてかひなをみすの下よりさし

入れて侍りければよみ侍りける

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそをしけれ

といひ出し侍りければ返事によめる

大納言忠家

契ありてはるの夜ふかき手枕をいかがかひなき夢になすべき

一條院御時皇后宮に清少納言はじめ侍りける

頃三月ばかりに二三日まかり出で侍りけるにか

の宮よりつかはされて侍りける

皇后宮定子

いかにして過ぎにし方を過しけむ暮しわぶてふ昨日今日かな

御かへし

清少納言

雲の上もくらしかねける春の日を所がらともながめつるかな

いぶかしく覺されける人のむすめの女房のつほ

ねにゆかりありて忍びて方違かたがへにまるれりけるを

曉とく出でにければ遣しける

選子内親王

あひ見むと思ひし事をたがふればつらき方にもさだめつる哉

選子内親王に侍りける右近後の齋院にまるりて

御禊のいだし車にのると聞きて又の日つかはし

ける

齋院中將

みそぎせし鴨の川波立ちかへりはやく見し世に袖はぬれきや

祭のつかひにて神だちの宿所より齋院の女房に

つかはしける

藤原實方朝臣

ちはやぶるいつきの宮の旅寐にはあふひぞくさの枕なりける

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて後太宰帥敦道の

みこ花たち花をつかはしていかが見るといひて

侍りければ遣しける

和泉式部

かをる香によそふるよりは郭公きかばやおなじ聲やしたると

上西門院賀茂のいつきと申しけるをかはらせ給

ひて唐崎にはらへし給ひける御ともにて女房の

もとにつかはしける

八條前太政大臣

昨日までみたらし川にせしみそぎ志賀の浦波たちぞかはれる

賀茂のいつきかはり給うてのち唐崎のはらへ侍

りけるまたの日雙林寺のみこのもとより昨日は

何事かなど侍りけるかへり事につかはされ侍りける

式子内親王

御手洗みたらしやかけたえはつる心地して志賀の波路に袖ぞぬれこし

右兵衛督に侍りける時中院右大臣中納言に侍り

けるに弓をかりおきて侍りけるをつかさ辭し申

してこもり侍りける時かの弓をかへしおくる

とて添へてつかはし侍りける

大宮前太政大臣

八年やみせまで手ならしたりし梓弓かへるをみるに音ぞなかれける

かへし

中院右大臣

なにかそれおもひ捨つべき梓弓また引きかへす時もありなむ

右大將兼長春日の祭の上卿に立ち侍りけるとも

に藤原範綱が子清綱が六位に侍りけるに忍摺しのぶずりの

狩衣をきせて侍りけるををかく見えければ又
の日範綱がもとにさし置かせける

左京大輔顯輔

昨日見ししのぶもぢずり誰ならむ心のほどぞかぎり知られぬ

上東門院に侍りけるを里に出でたりける頃女房

のせうそこのついでに箏つたへにまうでむとい

ひて侍りければ遣しける

紫式部

露しけきよもぎがもとの蟲の音をおほろけにてや人の尋ねむ

二條院の御時とし頃おほうちまもる事をうけた

まはりて御垣のうちに侍りながら昇殿はゆるさ

れざりければ行幸ありける夜月のあかりける

に女房のもとに申し侍りける

從三位頼政

ひと知れぬ大内山のやまもりば木がくれてのみ月を見るかな

三條の女御琮子遁世の後あふぎがみに月いだし

てつかはし侍るとして添へて侍りける

權中納言實綱

秋をへてひかりを増せと思ひしにおもはぬ月の影にもある哉

月爲友といへる心いふ事を

仁和寺後入道法親王

とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる心地こそすれ

月の歌あまたよませ侍りける時よみ侍りける 法性寺入道前太政大臣

ささなみやくにつみ神のうらさびてふるき都に月ひとりすむ

天の原そらゆく月はひとつにてやどらぬ水のいかでなからむ

題しらす

中務卿具平親王

ひとりるて月をながむる秋の夜はなに事をかは思ひのこさむ

赤染衛門

物思はぬ人もや今宵ながむらむ寐られぬままに月を見るかな

ながめつつ昔も月は見しものをかくやは袖のひまなかるべき
相模

和泉式部

ひとりのみ哀なるかとわれならぬ人にこよひの月を見せばや

思ふこと侍りける頃月のいみじくあかく侍りける

るによみ侍りける

久我内大臣

かくばかりうき世の中の思ひ出に見よともすめる夜半の月哉

山家月といへる心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

住みわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜半の月かな

百首の歌奉りける時月の歌とてよめる

前参議親隆

播磨がた須磨の月よみそらさえて繪島がさきに雪ふりにけり

月の歌十首よみ侍りける時

藤原家基

さよ千鳥ふけひの浦におとづれて繪島がいそに月かたぶきぬ

俊惠法師

いかだおろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬこほりなりけり

賀茂成保

あまの原すめるけしきは長閑にてはやくも月の西へゆくかな

顯昭法師

寂しさにあはれもいとどまさりけり獨ぞ月は見るべかりける

藤原清輔朝臣

今よりは更けゆくまでに月は見じそのこととなく涙落ちけり

年頃修行にまかりありきけるが歸りまうで来て

月前述懐といへる心をよめる

登蓮法師

もろともに見し人いかになりねらむにけむ月は昔にかはらざりけり

都をはなれて遠くまかる事侍りける時月を見て
よみ侍りける

法印 靜賢

あかなくに又もこの世にめぐりこば面がはりすな山の端の月

月の歌あまたよみ侍りける時いさよひの月の心

をよめる

源仲正

果なくも我がよのふけを知らずしていさよふ月を待ち渡る哉

見月戀故人といへる心をよめる

源仲綱

さきだちし人はやみにや迷ふらむいつまで我も月をながめむ

百首の歌奉りける時月の歌とてよめる

待賢門院堀河

残なく我がよふけぬと思ふにもかたぶく月にすむころかな

從一位藤原宗子やまひ重くなりて久しくまゐり

侍らで心細きよしなど奏せさせて侍りけるに遣

しける

近衛院御製

うき雲のかかるほどだに有るものをかくれな果てそ有明の月

箕面の山寺に日頃こもりて出で侍りけるあかつ

き月のおもしろく侍りければよめる

仁和寺後入道法親王覺性

木の間もる有明の月の送らずばひとりや山のみねを出でまし

月の歌とてよみ侍りける

道性法親王

琴の音を雪にしらぶときこゆなり月さゆる夜の峰のまつかぜ

權中納言長方

あかで入らむ名残をいと思へとや傾くままにすめる月かな

般富門院にて人々百首の歌よみ侍りける時月の

歌とてよめる

藤原定家

いかにせむさらで憂世はなぐさますたのみし月も涙おちけり

題しらす

山ふかき松のあらしを身にしめて誰かねざめに月をみるらむ

藤原家隆

まつ程もいとどころぞなぐさまぬ姨捨山のありあけのつき

八條院六條

世をいとふ心は月をしたへばや山の端にのみおもひ入るらむ

法師實修

寂しさも月見るほどはなぐさみぬ入りなむ後をとふ人もがな

藤原隆親

霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見るやととふ人もがな

圓位法師

世をのがれて後西山にまかりこもるとて人につかはしける

平實重

住みなれし宿をば出でて西へゆく月をしたひて山にこそいれ

俊惠法師

故郷月をよめる

ふるさとの板井のしみづ水草みづくさるて月さへすますなりにける哉

藤原家基

水上月といへる心を

さもこそは影とどむべきよならねど跡なき水にやどる月かな

藤原親盛

賀茂社後番歌合に月の歌とてよめる

何となくながむる袖のかわかぬは月のかつらの露やおくらむ

大江公景

山家曉霞といへる心をよめる

ましばふくやどの霞に夢さめてありあけがたの月を見るかな

静蓮法師

山家月をよめる

あしびきの山の端ちかくすむとても待たでやは見る有明の月

紀康宗

月照寒草といへる心をよめる

もろともに秋をやしのぶ霜枯のをぎの上葉をてらすつきかけ

月照山水といへる心を

法眼長眞

ますけ生ふる山下水にやどる夜は月さへ草のいほりをぞさす

山の端の月といへる心をよめる

藤原爲忠

ふかき夜の露ふきむすぶこがらしに空さえのほる山の端の月

荒屋月といへる心を

覺延法師

山風にまやのあしづき荒れにけり枕にやどる夜半のつきかけ

題しらす

法印慈圓

山ふかみ誰またかかるとすまひして楨の葉わくる月を見るらむ

月影のいりぬるのちに思ふかなまよはむやみの行くすゑの空

攝政前右大臣の家に百首の歌よませ侍りける時

月の歌の中によめる

俊惠法師

この世にて六十むそぢはなれぬ秋の月しでの山路もおもがはりすなにい

月の歌とてよめる

圓位法師

來む世には心の中にあらはさむ飽かをやみぬる月のひかりを

二條院の御時四代まで侍臣なる事をおもひてよ

み侍りける

皇太后宮大夫俊成

いかなれば沈みながらに年をへて代々の雲井の月をみるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時述懐の心をよ

める

藤原基俊

唐國にしづみし人もわが如くみよまで遇はぬなけきをばせし

僧都光覺維摩會の講師の請を申しけるをたびた

び漏れにければ法性寺入道前太政大臣に恨み申

しけるをしめぢがはらと侍りけれど又その年も

漏れにければ遣しける

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

運を恥づる百首の歌よみ奉りける中によめる 源俊頼朝臣

世の中のありしにも有らずなりゆけば涙さへこそ色變りけれ

述懐の心をよめる 覺審法師

すぎ來にしよそぢの春の夢の世は憂より外のおもひ出ぞなき

經因法師

果なしや憂身ながらも過ぎぬべき此世をさへも忍びかぬらむ

天王寺にまうでて侍りけるに長柄にてここなむ

源俊頼朝臣

ゆく末を思へばかなし津の國のながらの橋も名はのこりけり

道命法師

長柄の橋のわたりにて

何事もかはり行くめる世の中にむかしながらの橋ばしらかな

道因法師

今日見ればながらの橋は跡もなし昔ありきと聞きわたれども

津守國基身まかりてのち住吉にもすますなりに

けるを有基に具してあからさまに下りてはべり

けるに人の心もかはりて見えはべりければ松の

もとを削りて書きつけ侍りける 津守景基

人ごころ有らずなれども住吉の松のけしきはかはらざりけり

吉野の瀧をよめる 中納言經忠

白雲にまがひやせまし吉野やま落ちくる瀧のおとなかりせば

さがの大覺寺にまかりてこれかれ歌よみ侍りけ

るによみ侍りける 前大納言公任

瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

屏風に瀧落ちたる所をよめる

藤原長能

ぬけばちるぬかねばみだる足引の山よりおつる瀧のしらたま

京極前太政大臣布引の瀧見侍りける時よみ侍り

ける

六條右大臣

水のいろのただ白雲と見ゆるかな誰さらしけむぬのびきの瀧

龍門寺にまうでて仙室に書きつけ侍りける

能因法師

あしたづにのりて通へる宿なれば跡だに人は見えぬなりけり

おなじ龍門の心をよめる

藤原清輔朝臣

やまびとの昔のあとを來て見ればむなしき床をはらふたに風

布引瀧をよめる

藤原良清

音にのみ聞きしはことのかすならで名よりもたかき布引の瀧

むろのやしまをよめる

藤原顯方

たえずたつ室の八島の煙かな如何につきせぬおもひなるらむ

堀河院の御時百首歌奉りける時橋の歌とてよみ

侍りける

大納言師頼

かつらぎや渡しも果てぬものゆゑにくめの岩橋苔生ひにけり

おなじ御時うへのをのことも題をさぐりて歌つ

かうまつりけるに釣舟をとりてよみ侍りける

權中納言俊忠

いはい
いかりおろす方こそなけれ伊勢の海の汐瀬にかかる蟹の釣舟

百首の歌の中に松をよめる

修理大夫顯季

玉藻かるいらさがさきの岩根松いくよまでにか年のへぬらむ

夏草をよめる

源俊頼朝臣

汐みてば野島がさきの小百合葉に波こす風の吹かぬ日ぞなき

廣田社の歌合とて人々よみ侍りける時海上眺望
といへる心をよみ侍りける

權大納言實家

今日こそは都のかたの山の端も見えずなるをの沖に出でけれ

權中納言實宗

播磨がた須磨のはれまに見渡せば波は雲井の物にぞありける

右衛門督頼實

はるばるとおまへの沖をみわたせば雲井にまがふあまの釣舟

圓立法師

眺望の心をよめる
なにはがた潮路はるかに見わたせば霞にうかぶ沖のつりぶね

藤原重綱

春がすみ繪島が崎をこめつれば波のかくとも見えぬ今朝かな

祝部宿禰成仲

和歌浦をよみ侍りける

ゆく年は波とともにやかへるらむ面がはりせぬわかぬ浦かな

千載和歌集 卷第十七

雑歌中

五十御賀過ぎて又の年の春鳥羽殿の櫻のさかり
に御前の花を御覽じてよませ給うける

鳥羽院御製

心あらばにほひを添へよ櫻花のちのはるをばたれか知見るべき

落花の心をよみ侍りける

仁和寺後入道法親王覺性

はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世はたれもこころなられば

僧都頼實身まかりて後またの年の春禪定院の花

さかりなるを見てよみ侍りける

僧正尋範

宿もやど花もむかしに匂へどもぬしなき色はさびしかりけり

かしらおろして後東山の花見ありき侍りけるに
圓城寺の花おもしろかりけるを見てよみ侍りける

前中納言基長

いにしへにかはらざりけり山櫻はなは我をばいかが見るらむ

遁世の後はなの歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

雲のうへの春こそさらに忘れね花は數にもおもひいでじを

石山にたびたび詣で給ひけるをはてのたび關の

清水のもとに御車とどめてこのたびばかりやと

心ほそく御覽じてよませ給うける

東三條院

あまたたび行きあふ坂の關水に今はかぎりのかけぞかなしき

山にのほりてしばし行ひなどし侍りける時よみ

侍りける

前大納言公任

今はとて入りなむ後ぞおもほゆる山路をふかみ訪ふ人もなし
春の頃あはたにまかりてよめる

うき世をば峯の霞やへだつらむなほ山ざとは住みよかりけり
歎く事侍りける頃よめる

花さかぬ谷のそこにも住まなくにふかくも物をおもふ春かな

前大納言公任長谷ながたといふ所にこもりける時つ
かはしける

法性寺入道前太政大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせではるの暮れぬる

山寺にこもりて侍りけるころ雨降りて心細かり
けるに人のまうできて歌などよみけるついでに
よめる

道命法師

かくてだになほ哀なるおく山に君こぬよよをおもひ知らなむ

除目ぢめの頃つかさ給はらで歎き侍りける時範永が
もとに遣しける

大江公資

年ごとに涙の川に浮べども身はなけられぬものにぞありける

寄霞述懐の心をよめる

源仲正

思ふことなくてや春をすごさましようき世へだつる霞なりせば

世をのがれて後白河の花を見てよめる
散るを見て歸るころや櫻花むかしにかはるしらましなるらむを

花の歌あまたよみ侍りける時

花にそむ心のいかで残りけむ捨て果ててにきとおもふわが身をに
ほとけには櫻の花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば

世をそむきて又の年の春花を見てよめる
寂然法師

この春ぞおもひはかへす山櫻櫻花むなしきいろに染めしころを

題しらす

世の中を常なきものと思はずばいかでか花のちるに堪へまし
都うつりなど聞えける又の年のはる白河の花ざ
かりに女の手にて花の下におとしおきて侍りけ
る

讀人しらす

かくばかり憂世のすゑにいかにして春は櫻のなほにほふらむ

花ざかりに法成寺にまゐりて金堂のまへのはな

ちるを見てよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしを知らば櫻花ちりの末をもあはれとは見よ

依花待客といへる心をよめる

源定宗朝臣

やまざくら花をあるじと思はずば人をまつべきしばの庵かは

圓位法師がすすめ侍りける百首の歌の中に花の

歌とてよめる

藤原定家

いづくにて風をも世をもうらみまし吉野の奥も花は散りけり

花の歌とてよめる

源季廣

深く思ふ事し叶はばこむ世にも花見る身とやならむとすらむ

家に櫻をうゑてよみ侍りける

源師教朝臣

老が世に宿に櫻をうつし植ゑてなほこころみに花をまつかな

高倉院春宮の御時權亮に侍りけるを參議にてほ

どへ侍りける頃賀茂社の歌合とて人々よみ侍り

けるに述懐の歌とてよみ侍りける

權中納言實守

くらるやま花をまつこそ久しければるの都にとしは經しかど

崇徳院の御時十五首歌奉りける時述懐の心をよ

み侍りける

右兵衛督公行

春日山まつにたのみをかくるかな藤の末葉のかすならねども

歎く事侍りける頃よみ侍りける

前左衛門督公光

物思ふ心や身にもさきだちてうき世を出でむしるべなるべき

述懐の歌とてよめる

俊恵法師

數ならで年へぬる身は今さらに世をうしとだに思はざりけり

述懐の歌とてよめる

道因法師

いつとても身のうき事はかはらねど昔は老をなけきやはせし

述懐の歌よみ侍りける時昔白河院につかうまつ

りける事を思ひ出でてよめる

藤原家基

いにしへも底にしづみし身なれどもなほこひしきは白河の水

廣田社の歌合によめる

藤原盛方朝臣

哀れてふ人もなき身をうしとても我さへいかが厭ひ果つべき

右大將實房中將に侍りける時十五イ十首歌よませ侍り

けるに述懐歌とてよめる

中原師尙

數ならぬ身をうき雲の晴れぬかなさすがに家の風はふけども

學文料申し侍りけるをたまはらず侍りける時人

のとぶらへるかへり事によみて遣しける

大江匡範

おもひやれとよにあまれる燈火のかかけかねたる心ほそさを

題しらす

藤原公重朝臣

世のうさを思ひ忍ぶと人も見よかくてふるやの軒のけしきを

題しらす

藤原是忠

引く人もなくて捨てつる梓弓こころづよきもかひなかりけり

題しらす

一條院内侍參河

いかで我がひまゆく駒をひきとめて昔にかへる道をたづねむ

攝政右大臣の時家の歌合に述懐の歌とてよめる 源 師 光
今はただいけらぬ物に身をなして生れぬ後の世にもふるかな

つかさめしに伊勢になりけるを辭し申しける時

大僧正行尊がもとに遣しける 源 俊 重

いかにせむいせの濱荻みがくれておもはぬ磯の波にくちなば

たなかみの山里に住み侍りける頃風はけしかり

ける夜よめる 源 俊 頼朝臣

横の戸をみ山おろしにたたかれて訪ふにつけてもぬるる袖哉

山田の庵にけぶりの立ちけるを見てよめる 橘 盛 長

小山田の庵にたく火のありなしに立つ煙もやくもとなるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき山家の心を

よめる 二條太皇太后宮肥後

山里の柴のいをりをりに立つけぶり人まれなりとそらに知るかな

九月ながつきのつごもりがたにわづらふ事ありてたのも

しけなく覺えければ久しくとはぬ人につかはし

ける 藤 原 基 俊

秋はつる枯野の蟲のこゑたえば有りやなしやを人のとへかし

女のもとにまかりて月のあかく侍りけるに空の

けしき物心細く侍りければよみ侍りける 藤原道信朝臣

この世には住むべき程やつきぬらむ世の常ならず物の悲しき

題しらす 和 泉 式 部

命あらばいか様にせむ世をしらぬ蟲だに秋はなきにこそなけ

かずならで心に身をばまかさねど身にしたがふは心涙なりけり 紫 式 部

常よりも世の中はかなく聞えける頃さがみが許
につかはしける

藤原兼房朝臣

哀とも誰かは我を思ひ出でむある世にだにも訪ふひともなし

前大納言公任ながたにに住み侍りける頃風はけ

しかりける夜の朝つかはしける

中納言定頼

ふるさとの板間の風にねざめして谷のあらしを思ひこそやれ

かへし

前大納言公任

谷風の身にしむごとに故郷のこのもとをこそおもひやりつれ

前大納言公任入道しはべりてながたにに侍りけ

るとき僧の装束法服などおくとてつかはしけ

る

法性寺入道前太政大臣

いにしへは思ひかけきや取りかはしかく著むものと法の衣を

かへし

入道大納言公任

おなじとしちぎりしあれば君がきる法の衣をたちおくれめや

おなじとしの人になむ侍りける

三條院かくれさせ給うて後かの院のまへを過ぎ

けるに松の梢はおなじさまにてついがき所々く

づれたるにむぐらの茂りたるを見て其の内に江

侍従が侍りけるに遣しける

辨のめのと

むかし見し松の梢はそれながらむぐらの門をさしてけるかな

一品聰子内親王仁和寺に住みはべりける冬の頃

かけひのこほりを三のみこのもとにおくられて

侍りければ遣しける

輔仁のみこ

山里のかけひの水のこほれるは音きくよりもさびしかりけり

かへし

聰子内親王

山里のさびしきやどの住家にもかけひの水のとくるをぞまつ

大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつ

かはしけるなかに故大炊御門の右大臣の書きて

侍りけるさうしに書きておしつけられて侍りけ

る

太皇太后宮

この本にかきあつめたる言の葉をわかれし秋の形見とぞ見る

かへし

權大納言實家

このもとにかく言の葉を見る度にたのみし蔭のなきぞ悲しき

高野にまうで侍りける時山路にてよみ侍りける 仁和寺法親王守覺

跡たえて世をのがるべき道なれや岩さへ苔のころもきにけり

述懐の心をよみ侍りける

思ひ出のあらば心もとまりなむいとひやすきは憂世なりけり身イ

大峯とほり侍りける時笙の岩屋といふ宿所イにてよ

み侍りける

前大僧正覺忠

やどりする岩屋のこの苔筵いく夜になりぬ寐いイこそれイやられね

述懐の歌とてよみ侍りける

大納言宗家

身の程をしらずと人や思ふらむかくうきながら年をへぬれば

右近中將忠良

そむかばや誠の道はしらすとも憂世をいとふしるしばかりにれイ

二條太皇太后宮別當

杣川まがはにおろす筏のうきながら過ぎゆくものはわが身なりけり

百首歌の中に述懐歌とてよめる

藤原定家

おのづからあればある世に永らへて惜むと人に見えぬべき哉

攝政家丹後

うしとても厭ひもはてぬ世の中をなかなか何に思ひしりけむ
題しらす

法印倫圓

のほるべきみちにぞまよふ位山これより奥のしるべなければ

十月に重服になりて侍りける又の年の春傍官ど

も加階し侍りけるを聞きてよめる

中納言長方

もろびとの花さく春をよそに見てなほしぐるるは椎しばの袖

題しらす

藤原顯方賢

憂世にもうれしき世にも先にたつ涙はおなじなみだなりけり

遠き國に侍りける時おなじさまなる者どもこと

なほりのほると聞えけるととき其のうちに漏れに

けりと聞きて都の人のもとに遣しける

前右兵衛督惟方

この瀬にもしづむときけば涙川ながれしよりも濡るる袖かな

世をそむかむと思ひたちける頃よめる

空人仁法師

斯ばかり憂身なれ共すて果てむと思ふになれば悲しかりけり

心の外なることにて知らぬ國にまかりけるを事

なほりて京にのほりて後日吉の社にまゐりてよ

み侍りける

平康頼

思ひきや志賀の浦波立ち返りまたあふみともならむものとは

述懐の歌よみ侍りける時

登蓮法師

かくばかり憂き世の中を忍びても待つべき事の末にあるかは

修行にまかりありきける時よめる

覺禪法師

思ひかねあくがれ出でてゆく道はあゆく草葉に露ぞこほるる

世のつねなきことを思ひてよめる

權僧正永縁

夢とのみこの世の事の見ゆる哉さむべき程はいつとなけれど

わづらふ事ありて雲林院なる所にまかりけるに

人のとぶらへりければ遣しける

良 暹 法師

この世をばくもの林にかどでして煙とならむゆふべをぞ待つ

題しらす

讀人しらす

憂き事のまどろむほどは忘られてさむれば夢の心地こそすれ

紫 式 部

何處とも身をやる方のしられねばうしと見つつも永らふる哉

皇太后宮大夫俊成

述懐百首の歌の中に夢の歌とてよめる

うき夢はなごりまでこそ悲しけれこの世の後もなほや歎かむ

藤原季通朝臣

うつつをも現といかが定むべき夢にも夢を見ずばこそあらめ

厭ひても猶忍ばるる我が身哉ふたたび來べきこの世ならねば

上西門院兵衛

これや夢いづれか現うつはかなさを思ひわかでも過ぎぬべきかな

花園左大臣家小大進

明日しらぬみ室の峯のねなし草何あだし世に生ひはじめけむ

前大僧正覺忠御嶽より大峯にまかり入りて神仙

といふ所にて金泥法華經書き奉りて埋み侍ると

て五十日ばかりとどまりて侍りけるに房覺熊野

のかたよりまかり入りけるにつけて言ひおくり

ける
前大納言成道通₁

をしからぬ命ぞさらにをしまるる君がみやこに歸り來るまで

かへし
前大僧正覺忠

憂世をば捨てて入りにし山なれど君がとふにや出でむとすらむ

閑居水聲といへる心をよみ侍りける 仁和寺法親王守覺

岩そそぐ水よりほかにおとせねば心ひとつにすましてぞ聞く

高野に参りて侍りけるに奥の院に靜蓮法師が庵

室にまかりたりけるに哀に見えければかへりて

遣しける 權大納言實國

たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりしくさの庵かな

秋の頃山に登りて横川の安樂の五僧の許にまか

れりけるに正法房の障子に書き付け侍りける 藤原公衡朝臣

なほざりにかへるたもとはかはらねど心ばかりぞ墨染ほのそで

題しらす 法印慈圓

おほけなくうき世の民におほふかなわがたつ袖にすみ染の袖

寂しさにうき世をかへて忍ばずばひとり聞くべき松の風かは 寂蓮法師

般富門院大輔

つくづくとおもへばかなし曉の寐覺も夢を見るにぞありける

西住法師

まどろみまでいてさても止みなば如何いかせむ寐覺ぞあらぬ命なりける

六條院宣旨

先だつを見るは猶こそ悲しけれ後あとれはつべきこの世ならねば

さまかへむと思ひたつ人のものあはれなる夕暮

に箏のことひくを聞きて 二條太皇太后宮式部

いまはとてかきなす琴のはての緒の心細くもなりまさるかな

題しらす 空仁い人法師

大井河となせの瀧に身をなけてはやくと人にいはせてしがな

病ありて東山なる所に侍りけるをよろしくなり

て後いかがと人のとひて侍りける返事によめる 大江 公景

鳥邊山君たづぬとも朽ちはてて苔のしたにはこたへざらまし

題しらす 法眼兼覺

分けわびて厭ひし庭の蓬生も枯れぬと思へばあはれなりけり

賀茂社の歌合に述懐の歌とてよめる 寂蓮法師

世の中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらすばいとほましやは

山寺にこもり侍りけるに房にとどまりたる人

のいつか出でむすると言ひて侍りければつかは

しける 覺俊上人

世をそむき草の庵にすみ染のころものいろはかへるものかは

源清雅九月ばかりにさまかへて山寺に侍りける
を人のとひて侍りける返事せよと申し侍りけれ
ばよみて遣しける 源通清

思ひやれならはぬ山にすみぞめのそでに露おく秋のけしきを
題しらす 圓位法師

あかつきの嵐にたぐふ鐘の音をこころの底にこたへてぞ聞く
いづくにか身を隠さまし厭ひ出でて憂世に深き山なかりせば
述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる 皇太后宮大夫俊成

世の中よみちこそなけれ思ひ入る山の奥にもかぞ鳴くなる

秋の頃山寺にてよみ侍りける 藤原良清

思ふことありあけ方の鹿の音はなほ山ふかくいへるせよとや
題しらす 藤原家隆

見るゆめの過ぎにしかたをさそひきて覺むる枕も昔なりせば

太宰大貳重家入道身まかりて後山寺懷舊といへ
る心をよめる

藤原有家朝臣

初瀬山いりあひの鐘を聞くたびにむかしの遠くなるぞ悲しき

春の頃久我にまかれりけるついでに父のおとど
の墓所のイのあたりの花ちりけるを見てむかし花惜
み侍りけるこころざしなど思ひ出でてよみ侍り
ける

權中納言通親

ちりつもの苦のしたにも櫻花をしむこころやなほのこるらむ

かしらおろし侍りて後前中納言雅頼まだ小男に
侍りける時はじめて昇殿申させ侍りけるを許さ
れて侍りければよみて奏せさせ侍りける

入道前中納言雅兼

嬉しさをかへすがへすもつつむべき苦の袂はの狭くもあるかな

還昇くわんしやうして侍りける人のもとにつかはし侍りける 藤原季經朝臣
うれしさをよその袖までつつむかなたち歸りぬるあまの羽衣

今上の御時五節ころいのほど侍従定家あやまちある様
にきこしめす事ありて殿上除かれて侍りけるそ
の年も暮にける又の年のやよひのついたり頃
に院におほんけしき給ふべきよし左少辨定長が許
に申し侍りけるにそへて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだて果つべき

このよしを奏し申し侍りければいとかしこく哀
がらせおましまして今ははや還昇仰せ下すべき
よし御けしきありて心はるるよしのかへし仰せ

つかはせと仰せ出されければよみて遣しける 藤原定長朝臣
 あしたづのは籠いをわけて歸るなりまよひし雲路けいまふやはるらむ
 この道の御あはれびむかしの聖代にも異ならずとなむとき
 の人申し侍りける

千載和歌集 卷第十八

雑歌下

短歌

堀河院の御時百首歌奉りける時述懐の歌による
 源俊頼朝臣
 て奉りける

もがみがは 瀬々のいはかど わきかへり おもふころは
 おほけかれど 行くかたもなく せかれつつ そのもくづと
 なることは 藻にすむむしの われからと おもひ知らずは
 なけれども いはではえこそ なぎさなる かたわれぶねの
 うづもれて 引くひともなき なけきすと なみの起ち居に

あふけども 　　むなしきそらは 　　みどりにて 　　言ふこともなき
かなしさに 　　音をのみなけば 　　からころも 　　おさふるそでも
朽ちはてぬ 　　なにごとにかは 　　あはれとも 　　おもはむひとに
あふみなる 　　うち出のはまの 　　うちいでて 　　言ふともたれか
ささがにの 　　いかさまにても 　　かきつがむ 　　ことをのきばに
吹くかぜの 　　はけしきころと 　　知りながら 　　うはのそらにも
をしふべき 　　あづさのそまに 　　みや木ひき 　　みかきがはらに
せりつみし 　　むかしをよそに 　　聞きしかど 　　我が身のうへに
なりはてぬ 　　さすがに御代の 　　はじめより 　　くものうへには
かよへども 　　なにはのことも 　　ひさかたの 　　つきのかつらしのイ
折られねば 　　うけらがはなの 　　咲きながら 　　ひらけぬことの
いぶせさに 　　よものやま邊に 　　あくがれて 　　このもかのもに

立ちまじり 　　うつふしぞめの 　　あさごろも 　　はなのたもとに
ぬぎかへて 　　のちの世をだに 　　と思へども 　　たのむイおもふひとびと
ほだしにて 　　行くべきかたも 　　まどはれぬ 　　かかるうき身の
つれもなくなくもイ 　　經にけるとしを 　　かぞふれば 　　いつつのとをに
なりにけり 　　いま行くすゑは 　　いなづまの 　　ひかりの間にも
さだめなし 　　たとへばひとり 　　ながらへて 　　過ぎにしばかり
すぐすとも 　　ゆめにゆめ見る 　　こちして 　　ひまゆくこまに
ことならじ 　　さらにもいはじ 　　ふゆがれの 　　尾ばながすゑの
つゆなれば 　　あらしをだにも 　　待たずして 　　もとのしづくと
なりはてむ 　　ほどをばいつと 　　知りてかは 　　くれにとだにも
したのイむべき 　　かくのみつねに 　　あらそひて 　　なほふるさとに
すみの江の 　　しほにただよふ 　　うつせがひ 　　うつしごころも

うせはてて あるにもあらぬ 世のなかに またなにごとを
 みくま野の うらのはま木綿^ふ かさねつつ うきに堪へたる
 ためしには なる尾のまつ^しの つれづれと いたづらごとを
 かきつめて あはれ知られむ 行くすゑの ひとのためには
 おのづから しのばれぬべき 身なれども はかなきことも
 くもとり^の あやにかなはぬ くせなれば これもさこそは
 實なしぐり くち葉がしたに うづもれめ それにつけても
 津のくにの いく田のもりの いくたびか 海士のたくなは
 くりかへし ところに添はぬ 身をうらむらむ

反歌

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

百首歌めしける時よませ給うける

崇徳院御製

しきしまや やまとのうたの つたはりを 聞けばはるかに
 ひさかたの あまつかみ代に はじまりて 三十文字あまり
 ひと文字は いづものみやの やくもより おこりけりとぞ
 しるすなる それよりのちは ももくさの ことの葉しけく
 ちりぢりに かぜにつけつつ きこゆれど ちかきためしに
 ほりかはの ながれを汲みて ささなみの より來るひとに
 あつらへて つたなきことは はま千どり あとをすゑまで
 とどめじと おもひながらも 津のくにの なにはのうらの
 なにとなく ふねのさすがに このことを しのびならひし
 なごりにて 世のひとぎきは はづかしの もりもやせむと
 おもへども ころにもあらず かきつらねつる

おなじ百首奉りける時のなが歌

待賢門院堀河

とき知らぬ たにのうもれ木 朽ちはてて むかしのはるの
 こひしさに なにのあやめも わかすのみ かはらぬつきの
 かけ見ても しぐれに濡るる 袖のうらに しほたれまさる
 あまごろも あはれをかけて 訪ふひとも なみにただよふ
 つりぶねの 漕ぎはなれにし 世なれども きみにこころを
 かけしより しけきうれへも わすれぐさ わすれがほにて
 すみの江の まつのちとせの はるばると こすゑはるかに
 さかゆべき ときはのかげを たのむにも ながさのはまの
 ながさみて ふるのやしろの そのかみに いろふかからで
 わすれにし もみちのした葉 のこるやと おいそのもりに
 たづぬれど いまはあらしに たぐひつつ しもかれがれに
 おとろへて かきあつめたる みづぐきに あさきこころの

かくぎリイれなく ながれての名を をしどりの 憂きためしにや
 ならむとすらむ

旋頭歌

しもつふさのかみにまかれりけるを任はてて上
 りたりける頃みなもとのとしよりの朝臣につか
 はしける

源 仲 正

あづまぢの やへの霞を わけきても
 君にあはねば なほへだてたる ここちこそすれ
 かへし
 かきたえし ままの繼橋 ふみ見れば

源 俊 頼 朝 臣

へだてたる かすみもはれて むかへるがごと

百首歌たてまつりける時旅の心をよめる 左京大夫顯輔

あづまぢの 野嶋が崎の はまかぜに

わがひも結ひし いもがかほのみ おもかけに見ゆ

折句歌

二條院の御時こいたじきといふ五字を句の上に

おきて旅の心を 源雅重朝臣

駒なべていざ見にゆかむ龍田川しら波よするきしのあたりを

なもあみだの五字を句のかみにおきて旅の心を

よめる 仁上法師

なにとなくものぞ悲しきあき風の身にしむ夜半の旅の寐覺は

物名

さみだれをよめる 和泉式部

夜の程にかりそめ人やきたりけむ淀の水薦みこものけさみだれたる

すたれかは 中納言定頼

跡たえてとふべき人も思ほえずたれかは今朝の雪をわくらむ

かきのから 大貳三位

さかき葉はもみぢもせじを神がきのから紅に見えわたるかな

ふりつづみ 二條太皇太后宮肥後

池もふりつづみ崩れて水もなしうべ勝間田にとりも居のざらむ

かるかや

源俊頼朝臣

我が駒をしばしとかるかやま城のこはたの里にありと答へよ

まま木のやたて

御倉やままきのやたてて住む民は年をつむ共くちじとぞ思ふ

からかみのかたき

よと共に心をかけて頼めどもわれからかみのかたきしるしか

とりははき

刑部卿頼輔母

秋の野に誰を誘はむ行き返りひとりのははぎを見るかひもなし

百首うたたてまつりけるときのかくし題のうた

きりぎりす

待賢門院堀河

秋はきりぎりすぎぬれば雪降りてはるる間もなき深山邊の里

みづのみ

僧都 有慶

稻荷山しるしの杉のとしふりてみつのみやしる神さびにけり
かさぎのいはや
名にし負はば常に萬木の森にしもいかでかさぎのいはやすく寐る

登蓮法師

誹諧歌

花のもとにより臥してよみ侍りける

道命法師

あやしくも花のあたりにふせる哉をらば咎むる人やあるとて

卯花をよめる

源俊頼朝臣

うの花よいでことごとしかけ島の波もさこそは岩をこえしか

五月五日菖蒲をよめる

道因法師

けふかくる袂に根ざせ菖蒲草うきは我が身にありと知らずや

ともしをよめる

照射さしして箱根の山に明けにけりふたよりみより逢ふとせしまに
橘俊綱朝臣

みな月のつごもりがたはたおりの鳴くをききて

よめる

江侍從

夏の中ははた隠れてもあらずしておりたちける蟲の聲かな

題しらす

輔仁親王

秋來れば秋のけしきも見えけるを時ならぬ身と何にいふらむ

萩の露の玉と見ゆとて折りけれども露もなかり

ければよめる

藤原爲頼朝臣

朝露を日たけて見ればあともなし萩の上葉うらひにもものやとはまし

崇徳院の御時に百首歌奉りける時秋の歌とてよめる
花園左大臣家小大進

つばな生ひし小野の芝生の朝露をぬき散しける玉かとぞみる

野花をみて道にとどまるといへる心をよめる
僧都範立

落ちにきとかたらばかたれ女郎花こよひは花のかげに宿らむ

九月十三夜によめる

賀茂まさひら

暮の秋ことにさやけき月影は十夜じゅうやにあまりてみよとなりけり

隔我聞他戀といへる心をよめる
顯昭法師

板びさしさすやかや屋の時雨こそ音し音せぬかたはわあるくなれ

堀河院の御時百首のうち戀歌とてよめる
藤原基俊

笛竹のあな淺ましのよの中やありしやふしのかぎりなるらむ

旅戀
源俊頼朝臣

したひくる戀の奴のたび時にても身のくせなれや夕とどろきは

百首歌奉りけるに戀時の歌とてよめる
待賢門院堀河

逢ふ事のなけきの積る苦しさをおへかし人のこりはつるまで

六波羅密寺の講の導師にて高座にのほる程に聽

聞の女房あしをつみ侍りければよめる

良喜法師

人の足をつむにて知りぬ我が方へふみ遣せよと思ふなるべし

山寺にこもりて侍りける時心ある文を女のしば

空人仁法師

しば遣し侍りければよみ遣しける

おそろしや木曾のかけぢの丸木橋ふみ見る度に落ちぬべき哉

賀茂社にこもりて侍りけるに政平つねにまうで

きて歌よみ笛吹きなどしてあそびける傍なるつ

ほねにこもりたる人をも知りてそなたへも罷り

などしけるがその人出でて後久しくまうで來ざ

りければ遣しける

心覺法師

笛竹のこちくとなにに思ひけむ隣におとはせしにぞありける

あづまの方にまかりけるに八橋にてよめる

道因法師

八橋のわたりに今日も止る哉ここに住むべきみかはと思へど

女をかたらひ侍りけるをいかにも有るまじき事

なり思ひ絶えねといひ侍りければよめる

安性法師

つらしとてさてはよもわれやま烏頭はしろくなる世なりとも

あみだの小呪の文字を歌のかみにおきて十首よ

み侍りけるにおくにかき侍りける

源俊頼朝臣

上かみにおける文字は誠のもじなれば歌もよみ路を助けざらめや

山寺に詣でたりける時貝吹けるを聞きてよめる

赤染衛門

今日もまた午うまの貝こそふきつなれ未ひつじのあゆみちかづきぬらむ

題しらす

空也上人

極樂ははるけきほどと聞きしかどつとめていたる所なりけり

千載和歌集 卷第十九

釋教歌

維摩經十喻の中にイこの身は水の泡のごとしといへる心
をよみ侍りける

前大納言公

ここに消え彼處かしこに結ぶ水の泡の憂世に廻る身にこそありけれ

うかべる雲のごとしといへる心を

定なき身は浮雲によそへつつはてはそれらにぞなり果てぬべき

三身如來を觀する心をよませ給うける

花山院御製

世の中はみな佛なりおしなべていづれの物とわくぞはかなき

法華經藥草喻品の心をよみ侍りける

僧都源信

大空の雨はわきてもそそがねどうるふ草木はおのがさまさま

菩提といふ寺に結縁の講しける時聽聞にまうで

たりけるに人のもとよりとく歸りねといひたり

ければ遣しける

清少納言

求めてもかかる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

後冷泉院の御時皇后宮に一品經供養せられける

藤原國房

月影の影イのつねにすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば

寄月念極樂といへる心をよみ侍りける

堀河入道右大臣

入る月を見るとや人はおもふらむ心をかけてにしにむかへば

天王寺にまゐりて舍利ををがみ侍りてよみ侍り

ける

瞻西上人

薪つき煙もすみて逝いににけむこれやなごりと見るぞかなしき

御嶽にまうではべりける精進のほど金泥こんでいの法華

經書き奉りてかの御山にをさめたてまつらむと

てまゐり侍りける時思ふ心や侍りけむ物に書き

つけおきて侍りける

藤原敦家朝臣

夢さめむその曉をまつほどのやみをも照らせのりのもし火

かくてまうで侍りて後御山にてなむ身まかりにけるその後

故郷にてこの歌は見いでて侍りけるとなむ

三十三所の観音をがみ奉らむとて所々まゐり侍

りける時美濃の谷汲たぐみにて油の出づるを見てよみ

侍りける

前大僧正覺忠

世をてらす佛のしるしありければまだ燈火ともひも消えぬなりけり

あなほの観音を見たてまつりて

みるままに涙ぞおつるかぎりなき命にかはるすがたと思へば

提婆品の心をよめる

僧都覺雅

千年までむすびし水も露ばかり我が身のためと思ひやはせし

陀羅尼品の受持法華名者福不可量何況擁護具足

受持といふわたりを誦して持經者の結縁たのも

しくや侍りけむよみ侍りける

前大僧正快修

嬉しくぞ名をたもつだにあだならぬ御法の花にみを結びける

阿彌陀の十二光佛の御名よみ侍りける中に智惠

光佛の心をよめる

源俊頼朝臣

わびびとの心のうちをよそながら知るやさとりの光なるらむ

百首の歌めしける時普門品弘誓深如海の心をよ

ませ給うける

崇徳院御製

誓をばちひろの海にたとふなり露もたのまばかすに入りなむ

おなじ百首のとき華嚴經の心をよめる

前參議教長

果なくぞみよの佛と思ひけるわが身ひとつに有り知らずて

即身成佛の心を

照る月の心の水にすみぬればやがてこの身にひかりをぞます

法華經信解品の心をよみ侍りける

前大僧正覺忠

歸りても入りぞわづらふ槇の戸をまどひ出でにし心ならひに

冬のころ後入道法親王高野にこもりて侍りける

におくり給うける

崇徳院御製

降る雪は谷の戸ほそをうづむとも三世の佛の日やてらすらむ

御返事

仁和寺後入道法親王覺性

照らすなる三世の佛の朝日光にはふる雪よりもつみや消ゆらむ

百首の歌の中に法文の歌の中に普賢願の唯此願

王不相捨離といへる心を

式子内親王

ふるさとをひとりわかるる夕にもおくるは月の影光とぞ聞くとこそ聞け

百首の歌よませ侍りける時法文の歌に五智如來

をよみ侍りけるに平等性智の心をよみ侍りける 攝政前右大臣

人ごとにかはるは夢のまどひにて覺むればおなじ心なりけり

維摩經十喻此身如水中月といへる心をよめる 宮内卿永範

すめば見ゆにぐればかくる定なきこの身や水にやどる月かけ

比叡の山に堂衆學徒不和の事出で來りて學徒皆

ちりける時千日の山ごもりみちなむ事もちかく

ひじりの跡をたえむことを歎きてかすかに山洞

にとどまりて侍りけるほどに冬にも成りにけれ

ば雪ふりたる朝に尊圓法師のもとに遣しける 法 印 慈 圓

いとどしく昔の跡やたえなむとおもふもかなし今朝のしら雪

かへし 尊 圓 法 師

君が名ぞなほあらはれむ降る雪に昔のあとはいづもれぬとも

法華經弟子品内祕菩薩行の心をよみ侍りける 左近中將良經

獨のみくるしき海をわたるとやそこをさとらぬ人は見るらむ

攝政前右大臣家に百首の歌よませ侍りけるとき

法文の歌の中に般若經の心をよめる 藤原隆信朝臣

吳竹のむなしと説けることの葉は三世の佛のははとこそ聞け

おなじ百首の時色即是空空即是色の心をよめる 攝政家丹後

むなしきも色なるものと悟ればや春のみ空のみどりなるらむ

法華經我等長夜修習空法の心をよめる 前中納言師仲

長き夜もむなしき物としりぬれば早く明けぬる心地こそすれ

壽量品の心をよめる 圓 位 法 師

鷺の山月を入りぬと見る人はくらきにまよふこころなりけり

瞻西上人雲居寺の極樂堂に堀河右大臣まゐりて

歌よみ侍りけるによめる 神 祇 伯 顯 仲

いさぎよき池に影こそうかびぬれ沈みやせむと思ふ我が身を

小品經の常啼菩薩の心をよめる 寂 超 法 師

朽ちはつる袖には如何いかつつままし空しと説ける御法ならずば

維摩經十喻此身は夢の如しといへる心をよめる 藤原資隆朝臣

見るほどは夢もゆめとも知られねば現うつも今はうつつと思はじ

登 蓮 法 師

驚かぬわが心こそ憂かりければかなき世をばゆめと見ながら

高野にまゐりてよみ侍りける 寂蓮法師

あかつきを高野の山にまつほどや苔のしたにもありあけの月

煩惱即菩提の心をよめる 式子内親王家中將

思ひとく心ひとつになりぬればこほりも水もへだてざりけり

観音のちかひを思ひてよみ侍りける 前大納言時忠

たのもしき誓は春にあらねども枯れにしえだも花ぞ咲きける

法華經序品の心をよめる 藤原伊綱

春ごとなけきしものを法の庭ちるがうれしき花もありけり

受記品の心をよめる 右京大夫季能

水草みくさのみ茂き濁と見しかどもさても月すむ江にこそありけれ

法師品漸見濕土泥決定知近水の心をよみ侍りけ

る

皇太后宮大夫俊成

武藏野のほりかねの井もある物を嬉しくも水の近づきにけり

提婆品をよめる 顯昭法師

谷水をむすべばうつる影のみやちとせをおくる友となりけむ

勸持品をよめる 法橋泰覺

朽ちはててあやふく見えしをばただの板田の橋も今渡ろいすなり

うらみつけるけしきや空に見えつらむ嫉捨山をてらすつきかけ 藤原敦仲

神力品如日月光明能除諸幽冥の心をよめる 蓮上法師

日のひかり月の影とぞてらしけるくらき心のやみ晴れよとて

普賢普賢 勸發品の心をよめる 皇太后宮大夫俊成

さらにまた花ぞちりしく鷺の山のりのむしろのくれがたの空

滿三七日已乘六牙白象の心をよめる 中 原有 安

待ちいでていかに嬉しく思ふらむはつかあまりの山の端の月

雪朝聞法といふ心を 中 原 清 重

朝まだき御のりの庭にふる雪はそらより花のちるかとぞ見る

山階寺の涅槃會の暮れ方に遮羅入滅の昔を思ひ

てよみ侍りける 惠 章 法 師

望月の雲がくれけむいにしへのあはれを今日の空に知るかな

涅槃經の如於鏡中見諸色像の心をよめる 俊 秀 法 師

清くすむ心のそこをかがみにてやがてぞうつる色もすがたも

火盛久不燃といへる心をよめる 寂 然 法 師

烟だにしばしたなびけ鳥邊山たちわかれにしかたみとも見む

阿彌陀經の心をよめる 平 康 頼

鳥のねも波の音にぞかよふなるおなじ御法を聞けばなりけり

天王寺の御幸の時古寺忍昔といへる心をよめる 藤原定長朝臣

世をすくふ跡は昔にかはらねどはじめたてけむ時をしぞ思ふ

天王寺にまゐりて遺身舍利を禮してよめる 天台座主明雲

常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名残を見るぞうれしき

往生講式かき侍りける時教化の歌よみ侍りける 律 師 永 觀

みな人をわたさむとおもふ心こそ極樂にゆくしるべなりけれ

千載和歌集 卷第二十

神祇歌

後一條院の御時はじめて春日社に行幸ありける
に一條院の御時の例をおほしめしいださせ給う
てよませ給うける

上東門院

三笠山さして來にけりいそのかみ古きみゆきの跡をたづねて

長元八年關白左大臣歌合し侍りけるのち左方の
人よろこびに住吉に詣でて歌よみ侍りけるに左
の頭にてよみ侍りける

大納言經輔

住吉のなみも心をよせければうべぞみぎはに立ちまさりける

白河法皇熊野へまゐらせ給うける御供にてしほ
やの王子の御前にて人々歌よみ侍りけるによみ
はべりける

後三條内大臣

思ふことくみてかなふる神なれば鹽やに跡をたるるなりけり
百首の歌めしける時神祇歌とてよませ給うける 崇徳院御製
道のべのちりにひかりをやはらけて神の佛となのるなりけり

藤原清輔朝臣

あめのしたのどけかれとや榊葉を三笠の山にさしはじめけむ
中納言家成住吉にまうでて歌よみ侍りける時よ
める 大納言隆季

神代よりつもの浦に宮居して經ぬらむ年のかぎり知らずも
大納言辭し申して出で仕へず侍りける時住吉の

社の歌合とて人々よみけるに述懐の歌とてよみ侍りける

右大臣

數ふれば八年經にけりあはれわが沈みしことは昨日と思ふに

そののち神感あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍りけるとなむ

おなじ歌合に

皇太后宮大夫俊成

いたづらにふりぬる身をも住吉のまつはさりとも哀しむと思はむ

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける 右大臣

ふりにける松ものいはばとひてまし昔もかくやすみのえの月

俊惠法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり

廣田社の歌合とて人々歌よみ侍りける時社頭雪

といへる心をよみ侍りける

權大納言實國

おしなべてゆきのしらゆふかけてけりいづれ榊の梢なるらむ

有馬のゆに忍びて御幸ありける御供に侍りける

に湯の明神をば三輪の明神となむ申し侍ると聞

按察使資賢

珍らしき御幸をみ輪の神ならばしるしあり馬の出湯いそゆなるべし

熊野にまうでて侍りけるとき發心門の王子にて

權中納言經房

うれしくもかみに誓をしるべにて心をおこすかどに入りぬる

三輪の社にて霞をよめる 僧都範立

杉がえを霞こむれど三輪の山かみのしるしはかくれざりけり

藏人にならぬ事をなけきて年來賀茂社にまうで

侍りけるを二千三百度にもあまりける時貴布禰
の社にまうでて柱にかきつけける
平 實 重

今までになどしづむらむきぶね川かばかり早き神をたのむに

かくて後なむ程なく藏人になり侍りける近衛院の御時なり

片岡のはふりにて侍りけるをおなじ社の禰宜に

わたらむと申しける頃よみて物に書き付け侍り

ける
賀 茂 政 平

さりともとたのみぞかくる木綿襷ゆふたすきわがかたをか神と思へば

その後なむ禰宜にまかりなりにける

百首歌の中に神祇の歌よませ給ひける
武子内親王

さりともとたのむ心は神さびてひさしくなりぬ賀茂のみづ垣

賀茂社の歌合とて人々すすめてよみ侍りける時

述懐の歌によめる
賀 茂 重 保

君をいのる願を空にみてたまへわけいかづちの神ならばかみ

おなじき社の後番の歌合の時月の歌とてよめる
皇太后宮大夫俊成

きぶねがはたまちる瀬々のいはなみに氷をくだく秋の夜の月

述懐の歌の中によみ侍りける
法 印 慈 圓

わがたのむ日よしの影は奥山の柴の戸までもささざらめやは

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける
法 橋 性 憲

いつとなくわしのたかねに澄む月の光をやどすしがのうら波から崎

日吉の社に御幸侍りける時あめのふり侍りける

その時になりて霽れにければよみ侍りける
中 原 師 尙

御幸する高根のかたに雲はれてそらに日吉のしるしをぞ見る

高野の山を住みうかれて後伊勢の國二見の浦の

山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申
す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける
圓位法師
深くいりて神路の奥をたづぬればまたうへもなき峯のまつ風

治承四年遷都の時伊勢太神宮にかへりまゐりて
君の御祈念し申し侍りてよみ侍りける
大中臣爲定朝臣
月讀の神してらさばあま雲のかかるうき世も晴れざらめやは
そののち世の中なほり侍りけるとなむ

石清水社に歌合とて人々よみ侍りける時社頭月
といへる心をよめる
能蓮法師

石清水きよきながれの絶えせねば宿る月さへくまなかりけり
長元九年後朱雀院の御時大嘗會主基方の神あそ
びの歌丹波國神なび山をよめる
藤原義忠朝臣

ときはなる神なび山の榊葉をさしてぞいのるよろづよのため

治曆四年後三條院の御時大嘗會主基方神樂の歌

いはや山をよめる
藤原經衡

うごきなく千代をぞ祈るいはや山とる榊葉のいろかへすして

寛治元年堀河院の御時の大嘗會悠紀方神あそび

の歌諸神郷をよめる
前中納言匡房

いにしへの神の御代よりも神の祈るいはひは君が世のため

久壽二年院の御時大嘗會悠紀方の神樂の歌近江

國木綿園をよめる
宮内卿永範

神うくる豊のあかりにゆふ園の日影かつらぞはえまさりける

嘉應元年高倉院の御時大嘗會悠紀方の神あそび

の歌近江國守山をよめる

すべらぎを八百萬代の神もみなときはにまもる山の名ぞこれ

壽永元年大嘗會主基方の歌よみて奉りけるとき

神樂の歌丹波國神南備山をよめる 權中納言兼光

三島木綿かたに取り懸けかみなびの山の榊をかざしにぞする

元暦元年今上の御時大嘗會悠紀方の歌奉りける

神あそびの歌近江國諸神郷をよめる 藤原季經朝臣

もろがみの心にいまぞかなふらし君を八千代と祈るまことは

おなじ大嘗會の主基方の歌よみたてまつりける

神樂の歌丹後國千年山をよめる 藤原光範朝臣

ちとせやま神の代させる榊葉のさかえまさるは君がためとか

* * * * *

或本

卷第十九

在曉を高野の山下思ひとく心上

寂照法師

ひとすぢに心かくればむかふなる蓮のいとよをはりみだるな

千載和歌集終

金葉和歌集索引

(上句の頭五言及び下句の頭七言を採り
歴史的假名遣により五十音順に排列す)

ア 上句五言

あきかぜに	八二一	あさましや(見し)	二八ノ二	あづまぢの	一五ノ四
あきざりの	七二五	あさまだき(からる)	一五ノ二	あづまぢを	三八ノ五
あきならで	四六ノ六	あさまだき(吹き)	五ノ六	あづまびと	一四七ノ一
あきはなほ	三九ノ二	あさみどり	二ノ六	あはずとも	九二ノ四
あくといふ	一五九ノ二	あしがきの(そと)	一八ノ五	あはぢしま	五五ノ六
あさごとの	五九ノ二	あしがきの(ひま)	九三ノ三	あはねよは	一〇二ノ一
あさどあけて	二ノ五	あしねはひ	四〇ノ五	あはれまむと	一三〇ノ二
あされがみ	七五ノ一	あしねはふ	八七ノ二	あひみての	八三ノ三
あさひとも	七三ノ四	あしびきの	一〇三ノ三	あひみむと	七六ノ四
あさましや(逢瀬)	八三ノ一	あしぶきの	九三ノ六	あふことの(今は)	一〇四ノ二
あさましや(こは)	一〇六ノ二	あすよりは	五三ノ三	あふことの(かた野)	一〇四ノ五
あさましや(劔の)	一四ノ三	あだしのの	四八ノ五	あふことの(なきを)	一五〇ノ二
あさましや(など)	七七ノ四	あだなりし	八六ノ一	あふことの(ひさし)	九二ノ四
あさましや(涙に)	九七ノ二	あぢきなく	一〇三ノ三	あふことば(いつとな)	七五ノ四
		あづさゆみ(歸る)	一〇一ノ一	あふことば(いつとも)	九八ノ一
		あづさゆみ(さこそ)	一八ノ二	あふことば(かた)	一〇四ノ三
		あづさゆみ(春の)	三ノ二	あふことば(ながめ)	一〇四ノ六

金葉集索引 上句五言

ア

五四一

あふことは(舟人)	一〇五ノ三	あやめぐさ(ねたく)	二七ノ一	いかにせむ(うき世)	一四ノ三
あふことは(夢)	九三ノ二	あやめぐさ(ねをのみ)	一三ノ二	いかにせむ(數ならぬ)	七九ノ六
あふことも	九五ノ一	あやめぐさ(ひく手)	二七ノ三	いかにせむ(暮れ)	六二ノ三
あふことを(今宵)	八九ノ四	あやめぐさ(よどの)	二七ノ六	いかにせむ(末の)	五八ノ三
あふことを(とふ)	一〇四ノ二〇	あやめぐさ(我身)	二七ノ五	いかにせむ(なげき)	九三ノ五
あふごなき	一〇三ノ九	あやめにも	八ノ一	いかにせむ(山田)	一一九ノ二
あふとみて	七四ノ二	あらかりし	八〇ノ三	いかばかり	六六ノ四
あふまで	七四ノ三	あらしをや	四九ノ二	いかかへり	一一ノ一
あふみてふ	一〇三ノ五	あらたまの	二ノ四	いくとせに	一〇九ノ一
あふみにか	一〇四ノ四	あらちやま	六〇ノ二	いくとせも	一〇八ノ三
あまぐも	一〇三ノ二	あらをだに	一六ノ一	いけにすむ	八二ノ五
あまのがは(かへき)	三五ノ三	ありあけの(月待つ)	四四ノ四	いけにひづ	一八ノ二
あまのがは(これや)	二五ノ一	ありあけの(月も)	四九ノ一	いけみづに	三八ノ一
あまのがは(苗代)	一四〇ノ一	ありがたき	四九ノ一	いけみづの	六五ノ一
あまのがは(わかれ)	三四ノ五	ありふるも	八ノ四	いさぎよき	一四ノ二
あみだぶつと(唱ふる聲に)	一四三ノ一			いしだたみ	一三〇ノ一
あみだぶつと(唱ふる聲を)	一四六ノ二			いせのうみ	七二ノ二
あめふれば	一五二ノ三			いそなつむ	一一七ノ四
あめよりは	一五三ノ六			いたづらに	一三ノ一
あやしきも	一〇六ノ四			いづくにも	三八ノ三
あやにくに	八六ノ三			いつしかと(明け)	一ノ三

いつしかと(春の)	二ノ三	いまはしも	四八ノ六	うちがはの(底)	一三八ノ三
いつとなく(風)	六六ノ二	いまはただ	七四ノ四	うちたのむ	一三〇ノ四
いつとなく(戀)	八三ノ四	いまはとて	六ノ四	うちなびき	一ノ一
いつはりに	三七ノ五	いまひとの	九五ノ四	うづらなく	四九ノ二
いづれをか	二ノ三	いまよりは(思)	九三ノ二	うとましや	一〇三ノ一〇
いつをいつと	一四〇ノ三	いまよりは(心)	四三ノ二	うのはなの(青葉)	二二ノ四
いとかやま	六ノ二	いもせやま	四九ノ六	うのはなの(咲かぬ)	二二ノ五
いとせめて	一五三ノ三	いりひさす	一七ノ三	うのはなを	二二ノ三
いとどしく	八九ノ一	いろかへぬ	二七ノ四	うぶねには	一五〇ノ三
いなばふく	三六ノ二	いろふかき	五ノ二	うめがえに	四ノ三
いなりやま	二四ノ四	いろみえぬ	九三ノ一	うめのはな	四ノ二
いにしへの	四二ノ二	いろもかも	一四〇ノ二	うらむとも	一〇二ノ二
いにしへは	一三ノ四			うらむなよ	一〇一ノ四
いのちだに	七九ノ二			うらやまし(如何に)	一一ノ六
いのちをし	八四ノ三			うらやまし(浮世)	一一ノ二
いのちをも	一四二ノ四			うらやまし(雲の)	一一ノ三
いはしるの	五八ノ五			うれしくも	一一四ノ二
いはぬまは	八四ノ一			うゑおきし	一〇八ノ一
いはばしる	八七ノ四				
いへのかぜ	一一七ノ三				
いまぞしる	一三九ノ一				

イウカ		ウ		オ	
うかりしに	一三五ノ一	うがはの(河瀬)	四九ノ三	おきつしま	七ノ一
うきみをし	一四〇ノ一				
うぐひすの(木傳ふ)	三ノ六				
うぐひすの(鳴く)	三ノ三				
うたたれに	八六ノ五				
うたたれの	一一七ノ一				

おくりては
 おくれゐて
 おさふれど
 おしなべて
 おとたかき
 おとにきく
 おとにだに
 おとばやま
 おどろかす
 おなじくば
 おのづから(秋は)
 おのづから(夜がる)
 おのづから(我が)
 おほえやま
 おほゐがは(いくせ)
 おほゐがは(岩波)
 おほゐがは(散る)
 おほゐがは(紅葉)
 おほゐがは(ゐぜき)
 おもかげは
 おもはむと

九九ノ三
 七〇ノ一
 九三ノ四
 二〇ノ三
 六五ノ二
 九八ノ四
 五四ノ一
 五〇ノ五
 二四ノ五
 二八ノ一
 三六ノ一
 八二ノ三
 六四ノ三
 二六ノ二
 三三ノ三
 五〇ノ四
 五三ノ一
 五四ノ四
 五二ノ二
 七七ノ三
 九〇ノ三

おもひあまり
 おもひいづや
 おもひかれ
 おもひきや(逢ひ)
 おもひきや(雲井)
 おもひぐさ
 おもひやる
 おもひやれ(須磨)
 おもひやれ(とほで)
 おもひやれ(めぐり)
 おもふこと

かがみやま(うつろふ)
 かがみやま(嶺)
 かきくらし
 かきたえて
 かぎりありて(散り)
 かぎりありて(散る)
 かぎりありて(別る)
 かくてしも

七九ノ四
 七五ノ五
 二〇ノ四
 九三ノ三
 一三ノ四
 八七ノ一
 一三〇ノ五
 七四ノ五
 八四ノ六
 一九ノ五
 四六ノ二
 九ノ五
 四二ノ一
 六〇ノ一
 八四ノ四
 五ノ一
 一六ノ五
 三五ノ一
 一一ノ三

かくとだに
 かくばかり(こち)
 かくばかり(戀)
 かさとりの
 かしがまし
 かすがの
 かすがの
 かすがの
 かすがの
 かすがの
 かすめては
 かぜはやみ
 かぜふけば(枝)
 かぜふけば(波)
 かぜふけば(蓮)
 かぜふけば(柳)
 かぞふるに
 かたしきの
 かなしきの
 かはぎりの
 かはらやの
 かはりゆく
 かへさじと

七八ノ六
 一四三ノ三
 一〇五ノ五
 一〇三ノ六
 一〇四ノ七
 五ノ三
 一一三ノ一
 一〇五ノ一
 八八ノ一
 五六ノ一
 三七ノ一
 六ノ一
 三〇ノ三
 五ノ五
 六二ノ一
 七〇ノ二
 一三九ノ四
 四九ノ四
 一九九ノ一
 一三二ノ二
 一一六ノ一

かへるさは
 かへるはる
 かへるべき
 かみがきに
 かみがきの(あたり)
 かみがきの(みむろ)
 かみがきは
 かみなづき(しぐる)
 かみなづき(しぐれ)
 かみやまの
 かもがはを
 かりにくる

キ

ききもあへず
 ききわたる
 きくたびに
 きみうしや
 きみがよの
 きみがよ(天つ)
 きみがよ(いく)

三五ノ四
 一九ノ四
 六九ノ三
 一〇七ノ一
 一一五ノ三
 六〇ノ四
 一一五ノ二
 五三ノ一
 五四ノ二
 三三ノ一
 一四九ノ五
 四八ノ三
 二六ノ一
 二九ノ二
 二四ノ二
 六九ノ一
 六四ノ五
 六七ノ一
 六六ノ五

きみがよ(曇)
 きみがよ(末の)
 きみがよ(とみの)
 きみがよ(松の)
 きみこそは

ク

くさきまで
 くさのいほを
 くさのうへの
 くさのはに(かどで)
 くさのはに(はかなく)
 くさのはの
 くさまくら(このたび)
 くさまくら(さこそ)
 くまもなく
 くものうへに
 くものなみ
 くもりなき(影)
 くもりなき(とよの)
 くもりなく

六七ノ二
 六四ノ六
 六七ノ四
 六四ノ四
 一〇〇ノ五
 一三九ノ三
 一一ノ四
 四二ノ三
 四四ノ三
 一四九ノ四
 五三ノ四
 一八ノ一
 三三ノ三
 二〇ノ三
 四三ノ六
 一三ノ四
 三九ノ三
 四〇ノ二
 六五ノ三
 六八ノ五

ケ

くりかへし
 くるひとも
 くるるまも
 くれたけの
 けさみれば
 けふくれぬ
 けふこそは
 けふぞしる
 けふはさば
 けふもなほ
 けふもまた
 けふやさば
 けふよりや
 ここのへに
 ここのから
 ここのこそ
 ここのざし

コ

一五三ノ四
 一七ノ六
 九〇ノ四
 一三六ノ四
 一一三ノ三
 九ノ四
 九九ノ二
 一四三ノ三
 七二ノ四
 一四五ノ二
 二二ノ六
 三ノ五
 三ノ四
 六四ノ一
 二〇五ノ四
 一三七ノ四
 八五ノ二

こころには	一四二ノ四	こひわびて(思ひ)	八六ノ四	さぎのゐる	二八ノ一
こすゑには	一三ノ四	こひわびて(たえぬ)	九七ノ四	さくらさく	一四ノ三
こそみしに	一〇九ノ三	こひわびて(ながむる)	九一ノ三	さくらばな(雲)	一三ノ四
ことのねは	一四ノ三	こひわびて(寝ぬ夜)	八九ノ二	さくらばな(咲き)	一〇ノ二
ことのねや	一四ノ一	こひわぶる	九六ノ三	さくらゆゑ	一三ノ一
ことわりや(思ひ)	九一ノ二	こふれども	八五ノ一	ささがにの(糸の)	四八ノ四
ことわりや(交野)	五八ノ二	こゆるぎの	一三ノ三	ささがにの(糸引き)	四八ノ四
ことわりや(曇れ)	一五ノ三	こよひわが	四〇ノ一	さしのぼる	七二ノ三
このさとも	三二ノ二	こりつむる	一〇三ノ八	さだめなき	一三九ノ二
このぼるは	八ノ三	これにしく	七三ノ四	さつきやみ	三〇ノ六
このまもる	一三ノ三	ころもでに(晝は)	一四ノ二	さとごと	二九ノ五
このよには	一二ノ二	ころもでに(よこの)	五七ノ三	さのみやは	九五ノ二
こひこひて	三四ノ四	ころもでの	五九ノ一	さはみづに	三〇ノ四
こひしさを	七二ノ二	こゑせずば	六ノ三	さほがほの	四八ノ二
こひしなで	一〇一ノ三	さかきばや	六〇ノ三	さみだれに(入江)	二九ノ三
こひすてふ(なき名)	二二ノ五	さかりなる	四九ノ五	さみだれに(玉江)	二六ノ五
こひすてふ(名を)	七五ノ二	さきそむる	三五ノ五	さみだれに(水)	二九ノ一
こひすてふ(もじ)	七九ノ一	さきにけり	三五ノ六	さみだれは(沼の)	一〇二ノ五
こひわたる	八八ノ二	さきのよの	九ノ六	さみだれは(日敷)	二八ノ四
こひわびて(おさふる)	七六ノ三			さみだれは(小田)	二九ノ二

サ

さむしるに	六ノ四	しらかはの	七一	すみよしの(まつに)	一八ノ三
さもこそは(住の江)	一五ノ二	しらぎくの	八三ノ四	すみわびて	二九ノ一
さもこそは(都)	四六ノ四	しらくもと(嶺には)	一四ノ四	するすみも	九二ノ五
さやけさは	三九ノ一	しらくもと(よそに)	二四ノ五		
さよなかに	一七ノ二	しらくもと(をちの)	八一	せきもあへぬ	一三三ノ三
さらぬだに	四三ノ五	しらくもに(まがふ櫻の)	八六		
さりとも(思ふ)	七三ノ三	しらくもに(まがふ櫻を)	九二	そのゆめを	一三七ノ三
さりとも(書く)	一七ノ三	しらくもの	七六ノ三		
		しらざりき	七三ノ一		
シ		しらすげの	四七ノ三	タ	
しかたたぬ	三〇ノ五	しらせばや	八〇ノ二	たかせぶね	五六ノ二
しぎのゐる	一六ノ二	しらつゆと	四七ノ一	たかれには	五七ノ二
しぐれつつ	五三ノ二	しらつゆや	四七ノ六	たぐひなく	一一ノ二
したがへば	八二ノ二	しらなみの	五七ノ四	たちながら	八七ノ三
しづのめが	二二ノ二	しるらめや	七八ノ二	たつたがは	五五ノ二
しながどり	五六ノ四			たづねつる	六ノ六
しのすすき	七三ノ二	ス		たなばたに	三四ノ六
しののめの	八八ノ三	すぎきける	一一ノ二	たなばたの(あかぬ)	三五ノ二
しのぶれど	八五ノ四	すみがまに	五九ノ三	たなばたの(昔の)	三四ノ二
しまかぜに	八二ノ五	すみのはる	三九ノ四		
しめのうちに	一四七ノ五	すみよしの(まつかひ)	二九ノ三	たなばたは	七五ノ六

たにがはに
たにがはの(うへは)
たにがはの(よどみ)
たのめおく
たびねする
たまえにや
たまがしは
たまくしげ(かけこ)
たまくしげ(ふたがみ山)
たまくしげ(二見)
たまさかに(あふ夜)
たまさかに(波の)
たまづさは
たまつしま
たゆみなく
たらちねは
たらちめの

五ノ一
七六ノ五
五六ノ三
八七ノ五
五五ノ五
二七ノ四
二二ノ一
三六ノ一
三三ノ四
二四ノ四
九六ノ二
九六ノ五
四九ノ五
二〇五ノ二
一四六ノ一
一四三ノ五
一三七ノ二

ちとせまで(すまむ)
ちはやぶる(かしひ)
ちはやぶる(神)
ちらぬまは
ちりかか(影は)
ちりかか(景色)
ちりつもる
ちりばてぬ
つかへつる
つきかげに
つきかげの(さす)
つきかげの(すみ)
つききよみ
つきをみて
つつめども
つなぐれど
つにくにの
つまこふる
つみばしも

一三八ノ二
二〇ノ二
一五〇ノ四
八ノ五
五ノ一
一三ノ三
一〇ノ四
一五ノ二
一三〇ノ一
一一ノ五
四三ノ四
三七ノ二
五五ノ四
三九ノ五
八三ノ三
六二ノ一
一〇三ノ四
四六ノ一
一四二ノ五

つもるべし
つゆしげき
つゆのみの
つらかりし(心習ひ)
つらかりし(心習ひ)
つらきをも
つらしとも(思はむ)
つらしとも(愚なる)
つららぬし
つれづれと
てるつきの(岩間)
てるつきの(ひかり)
とことばに
としくれぬ
としごとに(かはらぬ)
としごとに(聞き)
としごとに(咲き)

六八ノ二
四五ノ三
一三八ノ二
七九ノ三
一〇六ノ三
九ノ五
一〇三ノ四
七二ノ二
二ノ一
九七ノ一
三三ノ二
四〇ノ三
三三ノ一
六三ノ三
三ノ一
三三ノ四
七ノ四

チ

ちぎりおきし
ちとせまで(君が)

九六ノ五
五〇ノ一

としふれど(春に)
としふれど(人も)
としふれば
としをへて
とだえして
とりのこの
とるてには

一〇九ノ四
七九ノ五
二二ノ二
一〇三ノ三
四三ノ三
二二ノ三
一五三ノ二

ナ

なかなかに
ながはまの
ながむれば(おぼえぬ)
ながむれば(戀しき)
ながむれば(ふけゆく)
ながれての
ながれても
ながあする
なきかげに
なきくより
なきなにぞ
なこそてふ

六二ノ二
六六ノ三
四四ノ二
七二ノ一
四三ノ二
七八ノ四
一三六ノ三
一七五ノ五
一四四ノ二
九七ノ三
一一九ノ一
一〇〇ノ二

なごりなく
なぞもかく(こひぢ)
なぞもかく(身に)
なつごるも
なつのよの(月)
なつのよの(庭)
なつやまの
ななそぢに
なにかおもふ
なにごとに
なにごとを
なにせむに
なになてる
なにとなく
なにはえの
なはしるの
なみだがは
なみまくら
なよたけの

四一ノ四
八二ノ二
八五ノ五
三〇ノ二
三三ノ六
二九ノ四
二〇ノ二
一四ノ一
一三ノ二
五五ノ一
六三ノ四
七五ノ三
九五ノ三
六二ノ五
一四八ノ六
七八ノ五
六一ノ三
五四ノ六

にしへゆく
にはのばな
ぬすびとと
ぬるるさへ
ぬれぬれも
ねにかへる
ねぬるよの
のきばうつ
のこりなく
のちのよと
のりのため
はがくれに
はかるめる

一三五ノ四
一四ノ一
一〇四ノ八
一八ノ四
五七ノ六
一三三ノ二
一三三ノ二
一二二ノ一
一九ノ二
八三ノ五
一四三ノ二
一五ノ一
一〇ノ一

はしたかの
はしたかを
はつせやま
はつゆきは
はなうるし
はなくぎは
はなさをふ
はなのみや
はなもみな
ははきぎの
ははそちる
はやきせに
はやくより(あさき)
はやくより(たのみ)
はるがすみ(たち隠せ)
はるがすみ(たち歸る)
はるかなる
はるごとに(あかぬ)
はるごとに(おなじ)
はるごとに(松の)
はるさめに

五七ノ一
五八ノ一
一〇ノ六
五七ノ五
一〇四ノ九
一五ノ三
二二ノ二
一八ノ六
六六ノ三
五〇ノ三
五二ノ五
一一九ノ四
一〇〇ノ三
一一三ノ四
五ノ四
七ノ五
七〇ノ四
一一ノ二
一一五ノ五
八ノ二
一一ノ四

はるさめは
はるたちて
はるのくる
はるのこし
はるのたに
はるのひの
はるのゆく
はるのよの
はるはをし
はるふかみ
ヒ
ひかげには
ひくこまの
ひぐらしの
ひとごころ
ひとしれず(思ふ)
ひとしれず(くれ)
ひとしれぬ(思ひ)
ひとしれぬ(戀)
ひとしれぬ(なき名)

四ノ一
一ノ二
二ノ二
二二ノ一
一四ノ一
二二ノ一
一九ノ一
一五ノ一
一九ノ三
一七ノ一
二四ノ一
三六ノ四
二二ノ一
九〇ノ五
九六ノ二
六六ノ六
九六ノ三
九〇ノ二
一〇二ノ二

ひとなみに
ひとはいさ(あり)
ひとはいさ(我が)
ひとよとほ
ひのいるは
ひのひかり
ひをのよる
フ
ふきかへす
ふくかぜに
ふくかぜも
ふぢごるも
ふぢなみは
ふぢばかま
ふみそめて
ふゆさむみ
ふゆのよの
ふるゆきに

一三五ノ二
一〇ノ一
七一ノ一
八三ノ二
一四八ノ三
一三三ノ一
五五ノ三
一四三ノ一
八六ノ六
七ノ二
三四ノ三
六七ノ三
三三ノ三
七八ノ一
五六ノ五
九九ノ四
五八ノ四

ほととぎす(あかで)
ほととぎす(おとほ)
ほととぎす(くもち)
ほととぎす(くもの)
ほととぎす(くもぬ)
ほととぎす(心)
ほととぎす(姿)
ほととぎす(尋ぬる)
ほととぎす(なきつ)
ほととぎす(一聲)
ほととぎす(ほのめく)
ほととぎす(まつに)
ほととぎす(まれに)

二三ノ六
二三ノ三
二六ノ六
二六ノ三
九四ノ二
二四ノ一
二二ノ一
二六ノ五
二二ノ二
二六ノ二
二五ノ二
二四ノ六
二五ノ四

まつかぜの(を琴)
まつがねに
まつひとの(大空)
まつひとの(宿を)
まつわれは
ミ
みかさやま(神)
みかさやま(光)
みかさやま(嶺)
みかさやま(もり)
みかづきの
みくまの
みしひとは
みしままに
みせばやな
みそぎする
みちのくの
みちもなく
みづがきの
みつぎもの

六五ノ四
四ノ一
九四ノ四
二五ノ一
二六ノ一
二六ノ二
四二ノ五
四二ノ五
四二ノ四
一〇二ノ五
一〇三ノ七
一四四ノ三
一四二ノ一
八四ノ五
三三ノ一
九〇ノ一
五九ノ六
六七ノ五
三三ノ五

みづとりの(つらら)
みづとりの(羽風)
みづのうへに
みづのおもに(ちり)
みづのおもに(松の)
みなかみに
みなつきの
みなひとは
みにまさる
みれつづき
みのうさも
みのうさを
みのほどを
みむろやま
みやこだに
みやまいでて
みわたせば

五六ノ六
七六ノ一
九四ノ三
一三ノ二
六三ノ三
一三ノ一
三三ノ五
一〇九ノ二
一三六ノ二
一〇ノ一
一三三ノ一
一三六ノ四
一五五ノ一
五四ノ五
五九ノ四
三三ノ五
一五三ノ六

マ

まくすはふ
ますらをは
ましかれて
まちしよの
まちつけむ
まつかぜの(音)

三三ノ二
一一ノ二
二四ノ三
八四ノ二
七三ノ三
一八ノ一

みくすはふ
ますらをは
ましかれて
まちしよの
まちつけむ
まつかぜの(音)

三三ノ二
一一ノ二
二四ノ三
八四ノ二
七三ノ三
一八ノ一

むかしにも
むかしみし

一七三ノ二
一三三ノ一

むしのねは
むらくもや
むらさきの

一三五ノ二
四三ノ一
一七ノ五

やどからぞ
やどごと
やどちかく

四三ノ一
三三ノ一
二五ノ三

ゆきつもる
ゆきとしも
ゆきのいろを

六八ノ一
二二ノ四
二二ノ二

ヌ

めづらしや
めのまへに

九五ノ五
九九ノ一

やまさくら(楢)
やまさくら(咲き)
やまざとの(おもひ)

一〇ノ五
九六ノ一
四四ノ五

ゆくすゑの
ゆくひとも
ゆくひとを

一〇八ノ二
一三六ノ三
四九ノ一

モ

もすのゐる
ものなこそ
もみぢちる

五〇ノ二
九六ノ五
五四ノ三

やまざと
やまざと
やまざと

一五ノ三
一〇七ノ二
二五ノ五

ゆみはりの
ゆめにだに
ゆめにのみ

一四九ノ四
七六ノ二
一三八ノ一

もらさばや

一〇〇ノ四

やまのほに(あかて)

四〇ノ四

ゆめ

一三六ノ一

もろともに(あはれ)

一〇八ノ四

やまのゐる

八九ノ五

よし

一一ノ一

もろともに(いと)

四四ノ三

やまふかみ

三六ノ三

よし

六ノ五

もろともに(草葉)

三七ノ四

やまぶき

一七ノ二

よそ

一三七ノ一

もろともに(苔の)

一三八ノ三

やまもり

一一〇ノ一

よそにては(岩こす)

九ノ三

もろともに(西へ)

一一三ノ三

やまもり

五二ノ三

よそにては(惜みに)

一一ノ三

ヤ

ユ

ヨ

よそにみる
よととも(曇らぬ)
よととも(心の)
よととも(袖の)
よととも(玉ちる)
よななほ
よのなかは
よのなかな
よはになく
よひのまに
よもすから(草の枕)
よもすがら(はかなく)
よものうみの(浦々)
よものうみの(波に)
よふふれど
よろづよと
よろづよに(かはらぬ)
よろづよに(君ぞ)
よろづよに(見る)
よろづよの(ためし)
よろづよの(ためし)

五ノ四
四三ノ六
一四ノ四
八九ノ三
八ノ四
一七ノ一
一三〇ノ三
四六ノ五
四六ノ三
八五ノ三
八〇ノ一
三〇ノ一
九六ノ四
一四九ノ一
六三ノ一
六四ノ二
二七ノ二
三四ノ一
九ノ一
七ノ三
六八ノ四

よろづよは
わがこひの
わがこひは(おぼる)
わがこひは(からす羽)
わがこひは(しづの)
わがやどに
わかれちを
わきもこが
わきもこに
わすられて
わすられむ
わすれぐさ
わたつみの
われこそは
われのみぞ
われひとり
なぐらやま

六三ノ二
九四ノ一
七四ノ一
八六ノ二
一〇六ノ一
一六ノ四
七〇ノ三
九ノ一
二六ノ四
二九ノ三
一〇三ノ一
九三ノ一
一四三ノ四
三七ノ六
二〇ノ一
七二ノ五
五二ノ六

をしへおきて
をしめども
をのえは
をばはら
をみなへし(咲ける)
をみなへし(夜のま)

一四二ノ二
五二ノ五
一〇ノ三
四七ノ二
四七ノ四
四八ノ一

下句七言

あかしのうらや
あかていりにし
あかぬけしきを
あかねなみだに
あかねさすとも
あきたつひこそ
あきのごとに
あきのはつかぜ

四三ノ四
八五ノ三
三四ノ六
三五ノ四
一四八ノ四
三三ノ一
四八ノ三
三三ノ三

あきのみづにも
あきをしらする
あくるもしらす
あくればかへる
あさかのぬまに
あさひのさとは
あさましかりし
あさましげにも
あしたのばらの
あしのしたげの
あしのまるやに
あしまのこほり
あとなきそらに
あなかまわれも
あなはらぐるの
あはでいくつき
あはでやみには
あはれいづこも
あはれこすゑに
あはれをそふる
あひみしほどを

四〇ノ三
三五ノ五
四四ノ五
二六ノ四
一一ノ二
六五ノ三
七五ノ五
八九ノ五
二ノ三
二八ノ五
三六ノ四
五六ノ二
二二ノ六
一〇四ノ七
一〇四ノ九
九七ノ一
一〇五ノ四
一四ノ四
二〇ノ一
四六ノ二
二〇ノ三

あひみむことも
あひみむことを
あふくまがはの
あふことかたに
あふよもしらぬ
あまくだります
あまてるかみや
あまのかはなみ
あまのよりや
あまりながびく
あやしきまでも
あやしくみえぬ
あやしやいかか
あやなくよるの
あらしのみれど
あらしのかぜの
あらずなるみの
あらしのやまの
ありとしるこそ
ありへてひとに
ありやなしやの

八五ノ五
七九ノ二
一三六ノ一
一三二ノ四
七五ノ六
一四〇ノ一
七七ノ五
一〇ノ六
一ノ三
八二ノ二
七六ノ一
九六ノ四
七六ノ四
二六ノ二
一五ノ一
五三ノ二
九〇ノ三
一三〇ノ五
一四四ノ四
一三九ノ四
七ノ四

あをげのしたに
いかさまにせば
いかであさかの
いかでかしげし
いかでかそらの
いかできくべき
いかでこころを
いかなるかぜの
いかなるかみの
いかにうらみし
いかにうらむと
いかにうらかぬ
いかにしてかは
いかにふくよの
いくよかひなき
いくよれざめぬ
いくよをすきて
いくらのひとの
いそぐみちをば

一八ノ六
七三ノ二
二七ノ三
一〇三ノ一
一四三ノ四
二二ノ六
一四二ノ二
一一ノ二
一四七ノ六
八二ノ一
一七ノ二
八六ノ三
九七ノ三
五三ノ二
三〇ノ五
五五ノ六
九五ノ五
一〇三ノ一〇
四ノ二

いたくなをりそ
いつありあけに
いつともしらで
いつぬきがはの
いつはりさへぞ
いつもはつれの
いづらはここに
いづるつきひの
いづれのほるか
いづればあくる
いとどこころは
いとどみがけり
いとひきそふる
いとひしかぜぞ
いとふこころの
いとほしとだに
いのるしるしは
いはがきこむる
いはたのなの
いはでもひとに
いはねどしるし

一六ノ五
三六ノ五
九〇ノ四
六六ノ五
九六ノ三
二四ノ二
一〇三ノ五
八六ノ四
六六ノ三
三三ノ四
七六ノ三
四三ノ五
六ノ一
一五ノ二
九九ノ五
七四ノ三
一四〇ノ二
七九ノ四
四八ノ六
九四ノ一
三五ノ六

いはひぞそめし
いはまのこほり
いはまのみづを
いはもるしみづ
いはれながらも
いふもたのみの
いまいくあきに
いまいくとせか
いまはあらしの
いまはこころに
いまはひなまつ
いまひとこゑは
いりひのさすに
いるさのやまに
いるともつきを
いるやまのはも
いるいろにこそ
いるいろになる
いるにいづれば
いるますふぢの
いるめくのべに

六七ノ一
一ノ一
一六ノ三
三三ノ六
一〇五ノ一
九三ノ二
一一ノ二
一〇八ノ二
四六ノ五
八四ノ四
一七三ノ四
三ノ六
一三ノ一
三ノ二
四〇ノ二
八九ノ四
四七ノ二
五四ノ二
九九ノ二
一八ノ四
四七ノ六

うきくもにのみ
うきねをなくと
うきはわがみに
うちみしひとも
うつしとどめよ
うつつにつらき
うづもれぬなを
うつらぬほどは
うつりしかげも
うつるはでやむ
うつるひにけり
うはげのゆきを
うはのそらなる
うひことのれの
うべさえけらし
うめづのうめは
うめのはながさ
うらみてもなほ
うらやましきは

一三九ノ一
九五ノ一
八七ノ二
一四三ノ六
七三ノ三
七六ノ二
一三八ノ三
八六ノ二
一三五ノ三
八三ノ四
一七ノ一
五七ノ六
二二ノ五
一一四ノ二
五六ノ六
一四七ノ四
一五三ノ五
八三ノ五
七〇ノ四

エ

えださしかばす

八ノ三

オ

おいそのもりの
 おきどころなく
 おくなるをもや
 おくほなごに
 おくれぬものは
 おつるなみだぞ
 おとにききつつ
 おどろかさでも
 おなじみかさの
 おなじみづにも
 おのがあをばも
 おぼるげならぬ
 おもかげにのみ(立たぬ)
 おもかげにのみ(立たむ)
 おもしろかりし
 おもはれじとの

一三ノ二
 一三八ノ一
 一五ノ二
 四七ノ一
 一四ノ三
 七〇ノ二
 八七ノ四
 一三ノ三
 四三ノ三
 三七ノ六
 五ノ五
 一〇ノ四
 九ノ五
 五ノ三
 一〇八ノ三
 一〇三ノ二

おもひかへして
 おもひすつれど
 おもひたえても
 おもひたえにき
 おもひのきより
 おもひのこせる
 おもひのしたに
 おもひもあへず
 おもひもかけぬ(鐘)
 おもひもかけぬ(人)
 おもひわづらふ
 おもふがりのみ
 おもふことなく
 おもふことなる
 おりたつなをも
 おろすいかだの
 カ
 かからぬやまの
 かかるこひちに
 かかれるまつも

五ノ一
 一三ノ三
 八四ノ二
 一〇ノ三
 九ノ一
 四〇ノ一
 一七ノ二
 三〇ノ二
 一五ノ三
 一四ノ二
 一九ノ三
 一〇四ノ五
 四三ノ六
 一三ノ四
 六九ノ二
 二九ノ三
 九ノ二
 七三ノ一
 一七ノ五

かきれつづきに
 かきれのうめよ
 かけじやそでの
 かげだにみえぬ
 かけてひさしく
 かげならべむと
 かげほのかにも
 かげよりほかに
 かげろふほどの
 かさきぎならば
 かさきむはるの
 かさぬにつけて
 かさねぬそでは
 かすもしられぬ
 かぜにしられぬ
 かぜにみだるる
 かぜのたよりに
 かぜのつてにぞ
 かぜのつらさに
 かぜのまにまに
 かぜのみあきの

二ノ三
 七三ノ五
 九八ノ四
 一〇ノ四
 六七ノ三
 一三ノ二
 二六ノ三
 一四ノ三
 一五ノ四
 六四ノ二
 三三ノ三
 一〇三ノ二
 六六ノ二
 八ノ二
 一三ノ一
 一八ノ三
 三〇ノ六
 一一ノ五
 一五ノ四
 三三ノ五

キ

かぜよりさきに
 かたしくそでに
 かたぶくつきに
 かたみにおきて
 かたよりしける
 かたらふこゑに
 かつらぎやまに
 かなほでとまる
 かのみなぐちに
 かへさのふねは
 かへすがへすや
 かみあらはれて
 かみさびゆかむ
 かみのこころも
 かやがのきばの
 からきはひとり
 かりのよどのの
 かりはかまをば
 かなばこずゑに
 かなるぞかぜの

一〇ノ四
 七四ノ五
 七三ノ三
 五三ノ四
 五ノ六
 一九ノ一
 五九ノ一
 八二ノ二
 一四八ノ二
 三四ノ五
 一四ノ三
 九八ノ二
 五ノ三
 四三ノ四
 二八ノ四
 一〇三ノ三
 八二ノ一
 一五ノ一
 五ノ二
 一三ノ四

きえにしあわを
 きえばともや
 きえやしなまし
 ききまどはしつ
 きくひとさへぞ
 きしのかげくさ
 きしのもみぢに
 きてみよとこそ
 きびのやまびと
 きみがこころな
 きみがちよにも
 きみこそつらき
 きみこそまるが
 きみぞつかへむ
 きみにあふごの
 きみはこえけり
 きみみるまでの
 きみをわするる
 きよたきがはに

一三ノ三
 一四ノ四
 九四ノ三
 二五ノ二
 七〇ノ三
 五七ノ二
 五〇ノ四
 一四ノ一
 三ノ三
 一〇四ノ八
 六四ノ三
 一〇三ノ四
 一〇三ノ七
 六八ノ五
 一〇三ノ八
 一〇四ノ四
 一七ノ四
 七三ノ四
 三九ノ三

くさのうへとも
 くすばひかかる
 くちきのそまの
 くまなきみれの
 くまなきみれを
 くもでにすがく
 くものかへしの
 くものかよひぢ
 くものちりぬぬ
 くもふきはらふ
 くもらであけぬ
 くもらばくもれ
 くもるよもなき
 くもぬにみゆる
 くもぬのさくら
 くもぬのつきを
 くもぬのはなを
 くるしきうみを
 くるればつきの

一三ノ二
 三六ノ一
 七九ノ五
 一三ノ二
 一三ノ三
 八〇ノ三
 一一ノ四
 一一ノ四
 一〇ノ四
 三九ノ四
 三七ノ二
 四一ノ五
 七七ノ一
 四一ノ一
 一〇ノ五
 一一ノ一
 七三ノ三
 一五ノ一
 一四六ノ二
 二二ノ四

ケ

けさしもおきて
けさしらつゆに
けさはかたみに
けさふくにしも
けふぞさかりに
けふのほひを
けふはこころに
けふはさかゆく
けふをばつれの

コ

こころうつらぬ
こころかるくは
こころしてふけ
こころつくしの
こころにかかる
こころにたがふ
こころのとまる
こころのままに(すめる)

一三〇ノ三
四八ノ一
七五ノ一
二ノ二
六ノ六
九ノ一
二七ノ一
一〇ノ三
七ノ二
四三ノ六
九七ノ二
九ノ四
二二ノ一
九〇ノ一
六九ノ三
二九ノ五
四一ノ四

こころのままに(我が)
こころのやみに
こころぼそくも(老い)
こころぼそくも(呼ぶ)
こころまどぼす
こころもゆかぬ
こころやおなじ
こころをさへに
こしぢくやしき
こしぢのそらは
こすしらなみの
こたかみやまに
こたふるさへぞ
ことしもけふに
ことしもむしの
ことのはさへぞ
このまのつきの
このまゆしろき
このみるばかり
このみをみるも
こぼうみうめに

三六ノ一
二三ノ四
二七ノ三
六ノ二
八ノ一
一三四ノ三
三八ノ三
一九ノ二
一三〇ノ四
一三七ノ一
六四ノ六
五七ノ三
二五ノ四
六三ノ四
一五ノ一
二二ノ二
一四三ノ五
三七ノ五
二〇ノ二
一五ノ一

こはなにのみの
こひしかるべき
こひしきことば
こひしきひとの
こひしさいか
こひしとだにも
こひしもなごか
こひするなをも
こひせよとて
こほるますだの
こまにこよひや
こやのいけみづ
こやゆふしでて
こやをのやまの
こよひとしらぬ
こよひのつきの
こよひのつきを
こよひもここに
こるばかりにも
これよりまさる
これをぞしもの

一四五ノ三
一一六ノ一
七五ノ三
七四ノ四
九一ノ五
九二ノ五
八三ノ三
一〇六ノ二
六一ノ三
三八ノ五
五六ノ四
二一ノ一
五七ノ五
三九ノ一
三九ノ二
四一ノ三
四九ノ一
九〇ノ五
八三ノ三
一五〇ノ五

サ

さえてもいづる
さきしかかれば
さくらなみふる
さこそはあまの
さこそはかりの
さこそみしかと
さすがにかけて
させるともなき
さそはぬわか
さほのかげせの
さみだれたらば
さむるほどこそ
さもあらぬそでの

四三ノ六
一四三ノ一
三ノ四
二二ノ一
四ノ一
二二ノ四

さやけきかげば
さやつかのまに
さゆるしもよの
さをににしきを

シ

しかありけると
しかのねにさへ
しかまにそむる
しくものなしと
したてるばかり
したにながると
したもみちする
しづくにかなる
しでのやまぢも
しなばやとのみ
しのぶかたかた
しばしはまだに
しらげばうたて
しらせでとると

一三三ノ二
一四四ノ二
六二ノ四
五四ノ四
一三六ノ二
四六ノ四
一五五ノ三
一三〇ノ一
五三ノ一
七六ノ五
八八ノ二
二七ノ二
一四五ノ四
八三ノ五
一九ノ一
一九ノ二
一九ノ四
一一八ノ一
一四一ノ一

ス

しらぬいのちに
しらぬやまぢに
しらぬたにの
しるしもみえず
すがたもひとに
すぎにしかたは
すげのをがさに
すすしくなりぬ
すみやきもなる

セ

せきのしみづの
せきのなぞとも
せきのながほに
せきやるかたも
せないでましぬ
せめてもをしき

ソ

一三七ノ四
九五ノ四
五四ノ五
三〇ノ三
一〇三ノ六
九八ノ一
一〇ノ一
一三ノ一
五八ノ四
一七ノ四
一〇ノ二
五〇ノ五
七四ノ一
一〇五ノ二
六二ノ一

そのこのころな
そでのうらにも
そとものをだに
そのことのほに
そのよのつゆに
そらなげきをば
そらものどかに
そらよりおつる

二九ノ二
一七ノ五
三六ノ三
一〇六ノ四
九一ノ一
一〇四ノ一
四三ノ二
一五ノ一

たえまはおほく
たがしめゆひし
たかつのみやに
ただかりそめの
ただこのもとを
たちものぼらぬ
たちわかるるは
たつしらのみの
たつたのかほの
たつたのやまの
たづねしこゑを

一〇六ノ一
三三ノ一
四二ノ二
九一ノ四
一三三ノ二
一〇二ノ二
一九ノ五
五五ノ三
五四ノ三
三三ノ一
二二ノ三

たつやあさまの
たでかるぶねの
たなびくやまを
たにがはくみし
たにのうぐひす
たにのかけはし
たにはむこまは
たねまきてけり
たのしきみよと
たのみしきみが
たのむればこそ
たのめねつきの
たびにかへすは
たまさかにとふ
たまたまきては
たまぬきかくる
たまもにさゆる
たまゑるかすを
たみやすげなる
たゆるはしぬる
たれかわがみを

八三ノ四
一五ノ一
七〇ノ一
一四三ノ三
一〇七ノ二
五ノ六
一四八ノ五
一六ノ二
六五ノ二
一三九ノ二
一五四ノ三
九八ノ五
七三ノ四
八五ノ二
八七ノ一
八四ノ五
五五ノ四
三八ノ二
六六ノ一
八四ノ三
一二ノ三

たれとかやまの
たれわがやどの
たれをまつとて
ちとせのほるを
ちとせのまつの
ちとせはいけの
ちとせをふとも
ちよのためしに
ちらすのみやは
ちらすはなぞと
ちりのうたがひを
ちればふもとの

二四ノ三
五〇ノ二
一七ノ六
八ノ六
六八ノ一
六三ノ三
六七ノ四
一四ノ一
一四ノ一
一四五ノ二
一四三ノ三
一四ノ四
六八ノ三
一七ノ一
六〇ノ一
四五ノ二
九ノ四

タ

つきのみおくる
つきばかりこそ
つきみよとしも
つきやむかしの
つきよりほかの
つちくれしてや
つむそでより
つもりてよもの
つゆのすがらぬ
つゆもあだには
つらきをゆめと
つれなきひとの
つれなきひとと
つれなきひとを
つれなくたてる

ト

とかたぞかれの
とかへるやまに
ときばのはしに
ときばのやまも

四四ノ三
四三ノ三
八九ノ一
四四ノ二
三七ノ三
一四九ノ二
七九ノ六
六四ノ四
三三ノ二
五〇ノ一
八六ノ五
一五五ノ一
七五ノ二
七八ノ二
一四九ノ三

とくるこころの
とこのやまかぜ
としまがいそに
とどこほらぬは
とどめがたきは
となせぞあきの
となせのたきは
とほれぬみこそ
とふことのはに
ともにおいぎと
とりとともいぎと
ながきながれを
ながきよすがら
ながむるつきを
ながるるつきや
ながれてとこそ
ながれてのよの
ながれてやとも
なきしほたれて

ナ

六六ノ一
四四ノ一
八九ノ三
一六ノ四
八六ノ六
五三ノ五
五三ノ一
一〇〇ノ一
一三六ノ四
一〇七ノ一
七三ノ三
六三ノ二
一四二ノ五
四四ノ一
三九ノ六
八三ノ二
六三ノ一
九九ノ一
九〇ノ二

なくわたりこそ
なげきにおつる
なげきのみこそ
なげきをやまと
ななせのよどに
ななへのあみに
なにあふことの
なにかはあまの
なにながれたる
なにあゆるを
なにかかれる(露)
なにかかれる(花)
なににつけてか
なにのみるめの
なにはのことも
なのりをせれば
なはしろみづに
なびかぬかみは
なびきもあへぬ
なびくにつけて
なべてならぬに

二五ノ五
九三ノ四
一七ノ二
一〇三ノ九
八〇ノ二
一四五ノ一
一〇〇ノ五
一〇一ノ二
二二ノ五
一五〇ノ二
八七ノ五
一八ノ一
三六ノ二
九六ノ五
二九ノ三
一一五ノ一
六九ノ一
六〇ノ三
四八ノ五
五ノ五
二七ノ五

なほくもかかる
 なほゆくすゑの
 なほゆめかとぞ(疑はれ)
 なほゆめかとぞ(疑はれ)
 なみおりかくる
 なみだにくるる
 なみだにそむる
 なみだのいろは
 なみだのうきに
 なみだのかはの
 なみだばえこそ
 なみのかけても
 なみのたちぬに
 なみのよりてや
 なみのよるこそ
 なみばかりこそ
 なみよりこそと

一三〇三
 七〇四
 七九三
 一〇六三
 一八〇二
 八八〇三
 一五〇二
 三五〇一
 八〇〇三
 七九〇三
 九三〇一
 八五〇四
 七五〇四
 四八〇二
 九八〇三
 四〇〇一
 一三〇三

にほひはわれを
 にほひまされる
 にまのさとびと
 ねぎすてられむ
 ぬるるたもとに
 ぬれぬにこそは
 ねたたくもをらで
 ねながらひとは
 のちのつらさの
 のどけきはるの
 のはらのかぜに
 のりにこそるを
 のりわづらはば

一八〇五
 九二〇二
 六五〇五
 八七〇三
 九四〇四
 五四〇六
 三三〇三
 二七〇六
 九三〇三
 六四〇一
 四七〇五
 一四〇一
 三三〇三

はかなきゆめぞ
 はぐくむそでの
 はじめてかぜは
 はたおるむしの
 はつはなともや
 はつはなよりも
 はつゆきとこそ
 はてはけぶりと
 はなこそものは
 はなだにわれに
 はなにはそでの
 はなのかつらも
 はなのさかりに
 はなのなだてに
 はなのほひに
 はなのみやかに
 はなのゆかりに
 はなはわがみの
 はなみるはるを
 はなもとときばの

七四〇二
 一三〇二
 一三〇二
 四五〇四
 二〇〇五
 二〇〇二
 二〇〇二
 一四〇三
 一〇九〇三
 一三〇一
 一三〇三
 三五〇二
 八〇〇四
 四七〇四
 七〇〇五
 七〇〇一
 一〇九〇四
 六二〇五
 一〇八〇一
 一〇九〇一
 八六〇一

ニ

はなよりさきに
 はなよりほかに
 はなをこころに
 はれもたゆくや
 ははいかにして
 はまなのほしに
 はるといふなの
 はるのそらにも
 はるほどもなく
 はるもとけずや
 はるよりのちの
 はるをかぎらぬ
 はるをこめても
 はれぬおもひに
 はれゆくたびに

一三四〇一
 一〇八〇四
 一三〇六
 六〇〇四
 一三八〇二
 五七〇四
 六〇〇六
 八八〇一
 一八〇二
 一八〇二
 五八〇五
 八〇〇五
 一〇〇三
 一五〇四
 七〇〇五
 四三〇一

ひくまののべに
 ひさしくひとの
 ひさしくよにも
 ひとときがすゑを
 ひとなみなみに
 ひとのこころを
 ひとのつらさを
 ひとへにはるを
 ひとめづつみを
 ひとやりならぬ
 ひとよをこめて
 ひとりないりそ
 ひとりもつきの
 ひとりやどもる
 ひとりやはるの
 ひとりやみまし
 ひとをつらしと
 ひねりふすとも
 ひまなきこひを

五〇〇四
 九三〇六
 一五〇一
 三三〇一
 三三〇一
 三三〇二
 八二〇四
 九五〇二
 二〇〇一
 七六〇四
 一四〇一
 三三〇一
 二五〇四
 四〇〇四
 八四〇六
 四〇〇四
 三七〇四
 九二〇六
 一〇四〇三
 八四〇一

ふきなみだりそ
 ふたおやながら
 ふたたびかざす
 ふたたびのぼる
 ふたともしとや
 ふたばのまつの
 ふちのはなとや
 ふでのすさびを
 ふみかよはさむ
 ふもとのさとに
 ふもとのさとに
 ふるさとにかに
 ふるさとこふる
 へだつるそらに

三三〇二
 一三〇一
 一三〇二
 一三〇三
 三三〇四
 六六〇四
 二四〇六
 七八〇一
 七〇〇一
 六〇〇五
 五九〇四
 五九〇五
 八〇〇一
 六〇〇三

ヒ

ひかりまちとる
 ひきくらぶべき
 ひくしめなはに
 ひくにはよわき

一三〇四
 一〇〇一
 一六〇一
 一五〇一

フ
 ひまなきこひを

ほころびわたる
 ほそたにがほの
 ほどをいくたび

四八〇四
 一三〇三
 七〇〇三

ホ

ほのかになりぬ
ほのめくあきの

三ノ三
三ノ一

まつにしるしの
まつにねぬよの
まつのはなさく
まつのみどりも
まつひといか
まつもかみよの
まつよのかずの
まつをひさしと

二四ノ四
三ノ五
六ノ二
二〇ノ三
二六ノ五
二二ノ一
二五ノ三
六四ノ五

みれのもみぢは
みのうきくさは
みむろのやまの
みやこにいづる
みやこのかたへ
みやこをしのぶ
みゆるははなの
みるともあかじ
みるひともなき
みるめはかづく
みるさかのぼる
みをたづねつ

五ノ三
一三五ノ三
五五ノ二
三ノ五
七ノ二
七二ノ二
一一ノ一
六五ノ一
五五ノ三
九五ノ三
一〇五ノ三
六二ノ二

マ

まきのいたやの
まきのしまびと
まきのそまやま
まきのつぎばし
まきゑにみゆる
まくらさへこそ
まくらにちりの
まこもかるべき
またあふさかも
まだうつつには
まだきにいはま
まだそらさえぬ
またなにごとに
まだふみもみず
まだふゆながら
まつことにても
まつさへふぢの

五四ノ一
四九ノ三
五九ノ四
二九ノ一
一一四ノ四
八九ノ二
三四ノ四
二八ノ三
七三ノ一
二四ノ五
八三ノ一
四九ノ五
一一ノ一
一一六ノ二
五八ノ六
一一二ノ二
一一九ノ三

みがけるやどの
みせばやひとに
みちのくにより
みづにはかこそ
みづのこころに
みなかみよりや
みなそのはらば
みれにあさひの
みれのさくらや
みれのはつゆき
みれのもみぢに

二七ノ四
八〇ノ四
一四七ノ二
五ノ一
二九ノ二
二ノ一
五〇ノ三
六七ノ二
九ノ三
五八ノ三
五ノ一

むかしのひとを
むかしをしのぶ
むすばれながら
むすぶこぼりの
むすぼほれたる
むなしきそらの

一一七ノ一
一三ノ一
八五ノ一
六ノ一
七八ノ六
九七ノ四

めにかげさげて

一〇五ノ五

モ

ものもがなや
ものむづかしく
もみぢのいろぞ
もみぢをしける
もらぬいはやも
もりてながれむ
もりにのみもる
もりのことのは

八ノ五
九三ノ三
五三ノ三
五ノ二
一一ノ四
一〇四ノ二
九六ノ六
一一七ノ三

ゆかしからずと
ゆきあひのそらな
ゆきげのくもと
ゆきさすらひて
ゆきさへつもる
ゆきとほなのみ
ゆきみむとしも
ゆくへもしらす(あくがれ)
ゆくへもしらす(人さそひ)
ゆふしでかけぬ
ゆふなみちどり
ゆめにもみきと

一一二ノ二
三四ノ一
五九ノ三
九九ノ三
六八ノ四
二二ノ四
五九ノ二
三九ノ五
四三ノ二
六〇ノ四
五九ノ一
一〇二ノ一

よのくもりなく
よぶこどりこそ
よるおとすなり
よるほこころに

四二ノ一
一五四ノ二
一五三ノ三
一四ノ二

ヤ

やがてうきよな
やどにもるこそ
やへながらなば
やましたてらす
やまのしづくに
やまのはのみぞ

一四三ノ二
五六ノ五
一七ノ二
一七ノ三
一〇一ノ三
四四ノ四

よがれがちなる
よしののやまと
よどむかたなき

二四ノ一
一三ノ四
七八ノ五

わがこころなる
わがこころのみ
わがしたもえの
わがしらぬまに
わがたがふれば
わがたまくらの
わがみのうへに
わがみはしかの
わがみひとつは
わがみもともに
わかれのとほく
わけゆくさをの
わすらるるなぞ
わすられしには
わたりやたびの

二六ノ一
一〇四ノ一〇
九一ノ三
二八ノ二
一一三ノ二
四五ノ三
六二ノ三
四六ノ三
一三ノ一
五八ノ一
一三五ノ二
四九ノ四
一〇三ノ五
一一九ノ一
一二六ノ三

わりなくやどる
われかきつらむ
われぞなごりの
われてぞいづる
われなればこそ
われまどばすな
われもうきよに
われゆゑいのち

四〇ノ五
七九ノ一
九四ノ二
一〇二ノ五
一〇三ノ四
一四二ノ二
一九九ノ四
九二ノ四

をやみだにせよ
をらではえこそ
をらぬそでさへ
をりからこゑの
をりしらぬみや
をりたがへたる
をりつるそでぞ
をりなやつしそ
をりにのみこそ

二六ノ六
二一ノ三
四ノ三
四六ノ六
一〇九ノ二
一三四ノ二
四七ノ三
一六ノ四
一五ノ三

井

あぐひにいとど

一三ノ一

ヲ

をぎゑもささで
をさまれるよに
をしのけごるも
をしむこころも
をちのやまべを
をのさとびと
をばといふものは
をばななみよる

一三ノ一
六五ノ四
六二ノ二
一三ノ五
二五ノ一
二二ノ二
一三ノ三
四九ノ二

金葉和歌集索引終

詞花和歌集索引

(上句の頭五言及び下句の頭七言を採り
歴史的假名遣により五十音順に排列す)

ア 上句五言

あかでのみ
あかねさす
あきかぜに
あきにまた
あきののの(くさむら)
あきののの(花見る)
あきのよの(月に心のおく)
あきのよの(月に心のひま)
あきのよの(月の光)
あきのよの(月待ち)
あきのよの(露も)
あきはぎを
あきはなほ
あきはみな

一九ノ四
一五ノ一
一八ノ一
一七ノ三
一八ノ二
一八ノ一
一七ノ六
一七ノ一
一七ノ五
一七ノ四
一七ノ三
一八ノ四
一七ノ五
一八ノ五
三九ノ四

あきふかみ(花には)
あきふかみ(紅葉)
あきふくば
あきやまの
あくがるる
あさぢふに
あさなあさな(鹿)
あさなあさな(露)
あさましや
あさまだき
あしかれと
あしびたく
あじろには
あだびとは
あづまぢの
あふことは
あふことも

一八ノ五
一四ノ五
一七ノ三
一七ノ五
一五ノ三
二五ノ三
二五ノ三
二八ノ三
一八ノ四
二四ノ三
一六ノ一
二二ノ一
二二ノ一
二二ノ一
二四ノ四
二八ノ二
一九ノ三
二〇ノ四
二五ノ一

あふことや
あふさかの(杉間)
あふさかの(關)
あふよとは
あまつかぜ
あまのがは(歸らぬ)
あまのがは(たま橋)
あまのがは(横ぎる)
あやしくも
あやめぐさ
あられふる
ありしにも
ありふるも
あればてて
いかでかく

二二ノ三
一八ノ二
三六ノ二
一七ノ二
一七ノ六
一七六ノ四
一七六ノ一
一七五ノ四
一九八ノ一
一七九ノ二
一八ノ三
一七ノ四
一七三ノ二
一八四ノ四
三三ノ二

いかでかは
 いかでわが
 いかならむ
 いかなれば(同じ空)
 いかなれば(同じ流)
 いかなれば(氷は)
 いかなれば(とだえ)
 いかなれば(待つに)
 いかばかり
 いくかへり
 いくらとも
 いけみづに
 いけみづの
 いざやまた
 いたくらの
 いたづらに
 いたまより
 いづかたへ
 いづくをも
 いづるいき
 いとひても

一九九ノ一
 二五三ノ二
 二〇〇ノ四
 一七〇ノ一
 二三〇ノ一
 一五九ノ六
 一七五ノ三
 二三四ノ一
 二〇〇ノ三
 二二六ノ二
 一八三ノ四
 三三三ノ二
 一六二ノ二
 二四六ノ二
 二四五ノ三
 二〇三ノ五
 二二二ノ二
 一八五ノ二
 二二九ノ一
 二四九ノ五
 二二六ノ一

いにしへの
 いにしへを
 いのちあらば
 いほりさす
 いまさらに
 いまはただ
 いまよりは
 いろいろに

一六二ノ三
 二四七ノ三
 一九九ノ五
 一八八ノ一
 一八七ノ二
 二三五ノ三
 二二五ノ五
 一八六ノ四

ウ

うきながら
 うぐひすの
 うぐひすは(木傳ふ)
 うぐひすは(花の都)
 うすくこく
 うちむれて
 うめのはな
 うもれぎの
 うらめしく
 うれしきは

二二三ノ三
 二九九ノ四
 二四〇ノ一
 二四〇ノ二
 一七二ノ二
 二四五ノ二
 一五九ノ一
 二三五ノ三
 二三四ノ三
 二〇五ノ五

オ

おいてこそ
 おいてのち
 おくやまの
 おとせぬは
 おのがみの
 おひたたで
 おぼつかな(變り)
 おぼつかな(まだ)
 おほはらや
 おほはじと
 おもはれぬ
 おもひかれ(今日)
 おもひかれ(そなた)
 おもひかれ(ながめ)
 おもひかれ(別れ)
 おもひでも(なき)
 おもひでも(なく)
 おもひやれ(寛)
 おもひやれ(心)

一六六ノ四
 二三五ノ四
 一八九ノ一
 二二二ノ二
 二二七ノ一
 二四八ノ四
 一七五ノ五
 二四〇ノ二
 二四一ノ五
 二〇一ノ四
 二三八ノ一
 一九八ノ四
 二四四ノ四
 二四八ノ一
 二三四ノ一
 二四七ノ二
 二二二ノ三
 二二三ノ五
 二四二ノ二

おもふこと
 おもへども

二二〇ノ一
 二五二ノ二

カ

かくしつづ
 かくてのみ
 かくとだに
 かぐやまの
 かげみえぬ
 かざこしの
 かすがのに
 かすがやま
 かすならぬ
 かぜふけば(河邊)
 かぜふけば(櫓の)
 かぜふけば(もしほ)
 かぜをいたみ
 かづきけむ
 かばかみに
 かはらむと
 かへりこむ

二三九ノ二
 二五〇ノ五
 一九八ノ三
 二二五ノ一
 二〇三ノ二
 二四六ノ五
 一五八ノ二
 二二〇ノ一
 一八九ノ五
 一七二ノ六
 一八七ノ三
 二〇六ノ四
 二〇三ノ二
 二二九ノ一
 一七三ノ三
 二四〇ノ三
 一九四ノ三

キ

かへるかり
 かみがきに
 かみなづき
 かりそめの
 かれはつる
 きくひとの
 きたりとも
 きのふかも
 きみがよに
 きみがよの
 きみがよは(くもり)
 きみがよは(白雲)
 きみすまば
 きみひかず
 きみまつと
 きみをわが
 くさがれの

二四三ノ四
 一八〇ノ二
 二二〇ノ四
 二四二ノ三
 二三四ノ三
 一八二ノ三
 二二一ノ三
 一五七ノ二
 一九〇ノ一
 一九二ノ四
 一九一ノ一
 一九二ノ二
 一七四ノ二
 二二三ノ四
 二二三ノ六
 二〇八ノ一
 一八三ノ二

ク

くまもなく
 くみてし
 くものうへは
 くもぬより
 くやしくも
 くれなゐに(涙の)
 くれなゐに(見えし)
 くれなゐの(うす花)
 くれなゐの(こそめ)
 くれはまづ

二二三ノ三
 二二五ノ二
 二四三ノ三
 二二二ノ一
 二五〇ノ四
 二〇五ノ二
 一八九ノ三
 一六〇ノ三
 二〇四ノ四
 一九六ノ二

ケ

けふよりは(天の川)
 けふよりは(たつ)

二四九ノ一
 一六八ノ一

コ

このへに
 このろさへ
 このろみに
 このろをば
 こずゑにて

一六二ノ四
 二〇一ノ五
 二三四ノ二
 二〇九ノ一
 一八六ノ三

こそのはる
 ことしだに
 ことしまた
 こぬひとを(恨み)
 こぬひとを(待ち)
 このみまば
 このもとに
 このもとを
 このよだに
 このよには
 こひしなば
 こひしなむ
 こひすれば
 こひわびて
 こほりして
 こほりあし
 こやのいけに

二四九ノ四
 一六九ノ四
 一八三ノ一
 二二ノ四
 一六ノ二
 二四ノ二
 二四ノ三
 二八ノ二
 二四ノ一
 二四ノ一
 二四ノ一
 二〇ノ二
 二〇ノ二
 二〇五ノ三
 二〇五ノ六
 二〇七ノ三
 二〇六ノ三
 一五ノ一
 一七〇ノ五
 一六九ノ一
 一九一ノ三

さきしより
 さくらさく
 さくらばな(風に)
 さくらばな(散ら)
 さくらばな(散り)
 さくらばな(手ごと)
 さつきやみ(鵜川)
 さつきやみ(花)
 さびしさに
 さほひめの
 さみだれの
 さみだれば
 さりとては

一六ノ三
 一六ノ三
 一六ノ六
 一六ノ五
 一六ノ一
 一六ノ一
 一七ノ五
 一七ノ五
 二七ノ五
 二七ノ四
 一五九ノ五
 二七ノ一
 一七ノ三
 二五ノ五
 一七三ノ五
 二七ノ五
 二七ノ一
 二〇五ノ一
 二〇四ノ二
 一八二ノ六

しらかばの(流)
 しらかばの(春)
 しらぎくの
 しらくもと
 しらくもば(さも)
 しらくもば(立ち)
 すぎにし
 すまのうらに
 すみのほる
 すみよしの(あさ澤)
 すみよしの(あらひと)
 すみよしの(波)
 すみよしの(細江)

二四ノ一
 一六ノ六
 二〇四ノ三
 一六ノ二
 一六〇ノ五
 一六〇ノ四
 一九〇ノ三
 二七ノ二
 二七ノ一
 二〇九ノ四
 一九三ノ五
 二二ノ一
 二二ノ二
 二〇六ノ五
 一八三ノ三
 二〇ノ三
 二〇六ノ五

サ

さかきとる
 さかきばを

一六九ノ一
 一九一ノ三

したもみち
 しづのめが
 しのぶるも
 しのぶれど
 しもおかぬ
 しもがるる

一七三ノ五
 二七ノ五
 二二ノ一
 二〇五ノ一
 二〇四ノ二
 一八二ノ六

セ

せきこゆる
 せきとむる
 せをばやみ

一八三ノ三
 二〇ノ三
 二〇六ノ五

ソ

そのことと
 そまがばの

二四七ノ四
 一七三ノ一

タ

たがさとに
 たけのほに(霞)
 たけのほに(玉)
 たちわかれ
 たなばたに(今朝)
 たなばたに(心)
 たなばたに(衣)
 たなばたの
 たなばたは
 たにがはの
 たれまきし
 たまさか
 たまさかに
 たままつる
 たれかこの
 たれにとか

二三八ノ三
 二二ノ一
 二〇九ノ二
 一九六ノ四
 二〇二ノ三
 一七五ノ二
 一七五ノ一
 一七六ノ三
 二四九ノ二
 一九九ノ一
 一七三ノ三
 一五七ノ四
 一八九ノ六
 二一九ノ四
 一九三ノ三

チ

ちらぬまに
 ちるはなに(せき)
 ちるはなに(又)
 ちるはなも

二八ノ三
 一六五ノ五
 二八ノ二
 一六五ノ一

ツ

つききよみ
 つきにこそ
 つきはいり
 つくづくと
 つくばやま
 つれよりも(露)
 つれよりも(歎き)
 つゆのみの
 つらしとて

二二三ノ四
 二三五ノ四
 二二三ノ一
 二六ノ三
 二四三ノ一
 二〇ノ二
 一七三ノ四
 二五ノ四
 二二三ノ二

ト

としへぬる
 としをへて(かけし)

二二三ノ四
 一六八ノ三

ナ

ながきよの
 なかなかに
 ながはまの
 ながらへば
 ながあすな
 なきつとも
 なくこゑも
 なくさむる
 なくむしの
 なごりなく

二五ノ一
 一六三ノ四
 一九二ノ一
 二二六ノ一
 二八ノ一
 一七〇ノ四
 一七二ノ四
 一九九ノ四
 一八ノ四
 一八四ノ三

なにごとも 一八六ノ一
 なにたかき 三三ノ四
 なにはえの(蘆間) 三三六ノ二
 なにはえの(繁き) 三三ノ三
 なみだがは 二四二ノ一
 なみださへ 二二二ノ一
 なみだてる 二七三ノ三
 なみだのみ 二五〇ノ一
 ニ
 にはもせに 一六五ノ四
 ヌ
 ぬしやたれ 一八〇ノ三
 ネ
 れのひすと 一五八ノ四
 ハ
 はかなくも 一七九ノ一
 はぎのはに 一七四ノ三
 はくひとも 一六四ノ二
 はつしもも 一八五ノ一
 はなすすき 三三八ノ四
 はりまなる 二〇七ノ一
 はるがすみ 二七〇ノ一
 はるくれば(あちかた) 二九〇ノ一
 はるくれば(花) 一六二ノ一
 はるごとに(心を) 一六二ノ五
 はるごとに(見る) 一六三ノ二
 はるさめの 一八四ノ二
 はるなつと 一七二ノ二
 はるのこね 二九〇ノ三
 ヒ
 ひくこまに 一七六ノ二
 ひぐらしに 一八九ノ二
 ひさぎおふる 一八六ノ二
 ひたふるに 三三三ノ二
 ひとしれず(物思ふ事) 三三三ノ三
 ひとしれず(物思ふ折) 二四八ノ三
 ひとたびは 二〇二ノ一
 ふかきいりて 三三六ノ四
 ふかくしも 三三九ノ二
 ふきくれば 一五八ノ五
 ふたつなき 一九六ノ一
 ふるあめの 三三〇ノ三
 ふるさとに(變ら) 一八一ノ五
 ふるさとに(間ふ) 一六三ノ四
 ふるさとの(花) 一六三ノ三
 ふるさとの(みかき) 一六〇ノ一
 ふるさとへ 一五七ノ三
 三三四ノ二
 フ
 ひとつとせを 一九三ノ二
 ひとつへだに 一六五ノ六
 ひとりゐて 一七九ノ一
 ひとつをとふ 一五〇ノ三
 ホ
 ほととぎす(曉) 一七〇ノ二
 ほととぎす(鳴く) 一六九ノ三

ほどもなく 二〇七ノ二
 マ
 まこもぐさ 一五九ノ二
 またこむと 一九五ノ三
 まだしらぬ 二六二ノ一
 まつしまの 一九一ノ五
 まつひとの 一八九ノ四
 まつほどに 一七三ノ二
 まつほどは 一七〇ノ三
 ミ
 みかきもり 二〇六ノ一
 みかさやま 二二三ノ三
 みかづきの 二三八ノ一
 みかりのの 二二二ノ四
 みづきよみ 一七六ノ五
 みなかみの 二四六ノ一
 みなひとの(昔) 二三九ノ五
 みなひとの(惜む) 二〇九ノ三
 みにかへて 一五九ノ三
 みのうきは 三三五ノ一
 みのほどを 二〇二ノ四
 みまさかや 三〇二ノ二
 みやこにて(覺束) 一九三ノ一
 みやこにて(眺めし月の) 二四六ノ三
 みやこにて(眺めし月を) 二四六ノ四
 みやまぎの 一六〇ノ二
 みやまには 一八八ノ二
 みよしのの 一七九ノ四
 みをしらで 二一九ノ二
 みをすつる 二四三ノ五
 ム
 むかしにも 一六九ノ二
 むかしみし(雲井) 二七〇ノ三
 むかしみし(垂井) 二四七ノ一
 むしのれも 一七三ノ六
 むとせにて 一九四ノ四
 むねはふじ 二〇三ノ四
 めづらしく 一九〇ノ二
 モ
 もえいづる 一五九ノ四
 もしほやく 一七二ノ四
 ももとせの 二四四ノ二
 もるともに(おきゐる) 二二二ノ二
 もるともに(たたまし) 一九三ノ二
 もるともに(山めぐり) 一八七ノ六
 ヤ
 やどちかく 一七二ノ一
 やへさける 一六六ノ一
 やへむぐら 一八一ノ三
 やまざくら(つひに) 二〇四ノ一
 やまざくら(をしむ) 一六二ノ三
 やまざとの 一六九ノ五
 やまざとは 一八四ノ一
 やましるの(いはた) 三三五ノ三
 やましるの(鳥羽田) 一七四ノ一
 やまびこの 一七〇ノ一

やまふかみ(おちて)
やよふかみ(やく炭)

一八七ノ一
一八八ノ四

よそにみし
よととも
よのなかに

二九九ノ一
一九九ノ二
二二三ノ三

わかのうちと
わがやどの
わかれちの

二三〇ノ三
一六五ノ二
一九五ノ二

ユ

ゆききえば
ゆきのいろを
ゆくすゑの
ゆくひとも

一五八ノ一
一六八ノ二
二三五ノ五
二二三ノ五

よのなかを
よのひとの
よもすがら(叩く)

二五三ノ三
二二三ノ三
二九九ノ三
一七〇ノ六

わすらるる(人目)
わすらるる(身は)

二二六ノ四
二二五ノ四
二〇一ノ一
二〇一ノ一

ゆふぎりに(梢)
ゆふぎりに(佐野)

一七九ノ六
二二一ノ四

よるのつる
よるのつる
よるのつる

二三四ノ四
一九四ノ一
一五八ノ三

わびぬれば
われのみや

二〇一ノ三
二〇九ノ五

ゆふぐれば(待たれし)
ゆふぐれば(物ぞ戀し)

二二六ノ三
二二九ノ三

よをかされ
よをふかみ

二二四ノ三
二〇八ノ三

をぎのはに(こととふ)

一八二ノ一

ゆふまぐれば
ゆめならで

一八三ノ五
二四八ノ二
二四七ノ五

わがこひは(あひ)

二四一ノ三

をぎのはに(露吹き)

一七九ノ二

ヨ

よしさらば
よそながら
よそになど

二三八ノ四
二〇〇ノ一
二五二ノ一

わがこひは(蓋身)
わがこひは(夢路)

二〇八ノ二
一九九ノ三
二〇三ノ三

をりをりの
をりをりの

一七九ノ二
一七九ノ五
一六七ノ一

下句七言

あかぬこころは
あかぬわかれと
あきしもことに
あきとおぼゆる
あきのこのはに
あきはもみちの
あきをかねても
あくがれいづる
あくそらをも
あけてのちこそ
あさせたどるも
あさちがばらに
あじろもたわに
あすもきくべき
あだちのまゆみ
あつしとのみや
あはぬおもひは
あはましくれを

一六三ノ五
一七六ノ三
一七〇ノ一
一七三ノ五
一八四ノ四
一八四ノ二
一七三ノ六
一七〇ノ六
一七〇ノ六
一七六ノ一
一七六ノ一
一八八ノ二
二二九ノ三
一八三ノ三
一六八ノ一
二〇一ノ二
一七三ノ四

あはれいかなる
あはれとばかり
あはれわかれの
あふせにわたす
あやしやなにの
あやなくはるの
あらしひかて
あらたなるよの
ありあけのつきも
ありしばかりの
あるかなきかの
あるじもしらぬ

二四〇ノ一
二五〇ノ四
二四九ノ四
一九四ノ二
一七五ノ三
二〇九ノ一
一六七ノ一
一八六ノ四
二四五ノ二
二二一ノ三
二二四ノ三
二二九ノ一
一五九ノ一

いかにすれども
いくあきかぜに
いくあきつゆの
いくきのこま
いくたのもりの
いたらぬさとの
いつかとくべき
いつかはひとを
いつかわがみに
いづくもつひの
いづくよりおく
いつしかとのみ
いつまでふべき
いつまでよそに
いづるをまつと
いづれかわれが
いづれののべも
いでてもひとに
いでむひとに
いとひやすらむ
いひあはせつつ

二〇六ノ二
一七九ノ四
一七三ノ三
一八二ノ二
一七四ノ二
一六二ノ一
一九六ノ三
一九七ノ二
二五〇ノ三
一九五ノ四
二〇八ノ三
二〇八ノ三
二〇八ノ一
二〇八ノ一
二〇一ノ四
二三八ノ四
二〇三ノ二
一九六ノ二
一七三ノ四
一八七ノ三

いまいくたびも
いまはかぎりも
いまはかぎりも
いまひとしほを
いまゆくすゑの
いりあひのかれの
いるまでつきを
いるまでみつる
いるをこころに

一六〇ノ四
二二三ノ三
一六〇ノ五
二三五ノ一
一七九ノ六
二二三ノ六
一七七ノ六
二三四ノ一

ウ

うきにはこゑも
うきはみにしむ
うきみのとがと
うきもつらきも
うきよをめぐる
うくてふいのの
うすばなざくら
うぢのわたりに
うつれるかげぞ
うつるはでやむ
うつるふいろを

二二三ノ二
二〇五ノ五
二〇〇ノ三
二〇五ノ三
二三八ノ一
二二九ノ一
一六〇ノ四
二四一ノ四
二四七ノ一
二〇四ノ三
一八二ノ六

オ

おいはひとをも
おきてのこせる
おきどころなき
おそくくれゆく
おつるなみだや
おときくをりぞ
おとぞよさむに
おとにのみやは
おなじこころに
おなじたかさぞ
おなじよにだに
おのがさまたま
おふなるものを

一八三ノ一
二二ノ三
二二六ノ二
二四三ノ三
一七六ノ四
二〇五ノ四
一八九ノ五
一八三ノ二
一七八ノ三
二〇九ノ三
二〇七ノ三
一八七ノ四
一七九ノ五
一九九ノ一
一六六ノ二
二二五ノ一
二〇五ノ六
一九一ノ五
二二三ノ一

カ

おほうちやまの
おほるにみゆる
おもがばりせぬ
おもはばものは
おもひあへぬは
おもひいれども
おもひしるらむ
おもひはひとに
おもふこころを
おもふことなき
おもふことをば
おもへどえこそ

一六一ノ四
二四七ノ三
二〇四ノ二
二二七ノ一
二二五ノ四
二〇三ノ三
二四九ノ五
一九八ノ一
一八二ノ一
一六三ノ六
二四二ノ四
一九四ノ一

かきながすべき
かくれゆくばた
かげばかりこそ
かげよりほかに
かすますものは
かすみにのみや

二四二ノ二
二四七ノ二
二二二ノ四
一七〇ノ四
一六三ノ二
一七二ノ五
一五九ノ三

かすみわたれる
かぞこそわたれ
かはらぬものは
かはるはひとの
かはれどかはる
かへるやまぢの
かみなづきにも
かみのしるしぞ
かみのよよりも
かみもうゑけむ
かれにしひとの
かわけるうへに
かざるぞはなの

二二七ノ三
一七九ノ一
一七七ノ四
二〇五ノ二
一九九ノ二
二三八ノ三
一八六ノ一
二二三ノ一
一九一ノ三
一九三ノ四
二二五ノ三
一八七ノ一
一六五ノ四

キ

きえせぬゆきと
きみとみかさの
きよみがせきに
くだけてものを

一六四ノ一
二三六ノ一
二三五ノ二
二〇三ノ二

ク

くだけてものを

二〇三ノ二

ケ

くちばがうへに
くもかくしてよ
くものうへまで
くものなみぢに
くもばふもとの
くもるとみれば
くもぬにまがふ
くもぬにみゆる
くもぬにものな
くやしきことの
くるあきごとに
くれゆくそらは

一八九ノ一
二五〇ノ五
二二三ノ一
二二三ノ五
二四六ノ五
一八八ノ一
二四五ノ一
一六二ノ五
一七八ノ六
二二九ノ二
一八一ノ一
一七五ノ二

コ

けふここのへに
けふにやまたも
けふのかざしほ
けふやわがよの
けぶりもなみも

一六二ノ三
一八九ノ六
一六八ノ三
一六五ノ三
二〇三ノ四

こころひとめを
こころいくたび
こころごころに
こころにえこそ
こころにかなふ
こころにもあらぬ
こころのうちを
こころぼそきは
こころもとなき
こころよわくも
こころをさへも
こねひとをだに
このことばかり
このしたかげも
このはとともに
このはのもとに
このよはてふの
このよをながく
こひしかるべき
こひしきことの
こひしきことは

二三五ノ四
一七八ノ四
一八一ノ四
一六五ノ二
一九五ノ三
二二二ノ一
二二五ノ三
二四九ノ二
二〇七ノ二
二〇一ノ三
一八〇ノ四
二二四ノ三
二四八ノ三
一七五ノ五
二四八ノ二
一八七ノ二
二四四ノ二
二二三ノ四
一九六ノ四
二二六ノ四
二〇一ノ一

こひしといふは 二〇〇ノ四
 こひのなみだの 二〇四ノ四
 こひはしぬとも 二二五ノ一
 こぼれやしぬる 一七九ノ二
 こまかにものを 二二〇ノ三
 こまのけしきも 一五九ノ五
 こよひのつきに 二二二ノ四
 こよひばかりの(月は) 二二二ノ四
 こよひばかりの(月を) 一七三ノ三
 こよひばかりは 一八五ノ二
 ころものせきを 一三三ノ二
 ころものそでを 二四九ノ三
 こをこひつつも 二二四ノ四

サ

さえでやひとに 一六八ノ二
 さかゆべしとは 二二〇ノ一
 さきはじめたる 一六三ノ二
 さくらばはなは 一六〇ノ二
 ささなみよする 一五七ノ一
 さしいづるつきの 二二二ノ三

シ

しかまのかちの 二〇八ノ二
 したてるやまは 一八三ノ五
 したはながるる 二〇六ノ三
 したばにつきも 一八二ノ五
 しづこころなく 一三三ノ三
 しのだのもりの 二四一ノ三
 しのびけりやと 二二二ノ三
 しのびにもゆる 一七三ノ四
 しらゆふかくる 一八九ノ三

ス

すぐるつきひも 二二五ノ五
 すてぬひとこそ 二二二ノ五

ソ

すむとてえこそ 二二八ノ二
 すゑたわむまで 二二九ノ四
 すゑばのつゆの 二二八ノ三

せきちよりこそ 一七八ノ二

そこにやどれる 一九二ノ三
 そなたにむきて 二二五ノ二
 そのことのはも 二二一ノ四
 そのばるまでと 二二八ノ二
 そらがくれする 二二五ノ三
 そらだきものの 一七五ノ四
 そりはてぬるか 二二二ノ四

タ

たえだえならで 二〇九ノ四
 たがさとまでか 一七一ノ五
 たがそめかけし 一六〇ノ一
 ただはるのひを 二二四ノ三

ただやまのはに 二四四ノ四
 たちかへるべき 一七二ノ六
 たづねゆくまの 一六二ノ一
 たつよりかてて 一五九ノ二
 たなばたにとや 一七四ノ三
 たなれのこまの 二二二ノ四
 たにのふるすを(思ひ) 二二四ノ一
 たにのふるすを(忘れ) 二二四ノ二
 たのめてこねは 二二四ノ二
 たびねぞこひの 二二八ノ四
 二〇三ノ一
 一九三ノ一
 二四六ノ四
 二四六ノ三
 二四四ノ一
 二二二ノ二
 二二二ノ二
 一八三ノ四
 二〇二ノ三

ちえのかすさへ 二二三ノ三

チ

ツ

ちかくもしかの 一八二ノ四
 ちづかもまたで 一九八ノ四
 ちとせをへつつ 一九〇ノ一
 ちよのむつきを 一九〇ノ二
 ちよばかぞへむ 一九〇ノ三
 ちよまできみと 一七六ノ五
 ちらさぬほどの 一五八ノ五
 ちらばひとへも 一六六ノ一
 ちりしくにはな 一八六ノ三
 ちりしくはなの 一四四ノ三
 ちりぢりならむ 二四一ノ一
 ちりなむのちを 一六二ノ四
 ちるはなよりも 二二九ノ二

つきしもいかで 一七二ノ二
 つきせずみゆる 一九三ノ一
 つきせぬちよの 一九三ノ二
 つきのもるにぞ 三三六ノ二
 つきばかりこそ 三三六ノ三
 つきはふゆこそ 一八七ノ五

ナ

つとめてのちぞ 二二五ノ四
 つながぬこまも 一五九ノ二
 つみえむことも 二二四ノ二
 つれなきひとの 二〇二ノ四
 つれなきひとと 一九九ノ三

とくるけしきも 二〇一ノ五
 としにひとたび 一七五ノ五
 とへとぞおもふ 二二九ノ四
 とやまのかすみ 一五七ノ二

なかなかよその 二〇〇ノ二
 なかばすきてぞ 二二五ノ三
 ながむるひとの 二二二ノ二
 なくればゆめの 一七〇ノ三
 なつばすずしき 一七三ノ一
 などしぬばかり 一九九ノ五
 なにごちして 二四七ノ四
 なにとてまつに 二二三ノ四

なになげくらむ
なにのつみなき
なびくをひとの
なみのよりこと
なりゆくほどの
なるとていとふ
なるみののべの

二五二ノ一
二〇〇ノ五
二〇六ノ四
二二〇ノ三
二二二ノ五
二二二ノ二
一八二ノ五

ぬるるはさても
ぬれぬやどかす

二二九ノ一
一八八ノ三

のこりありしな
のなかのしみづ
のべのあさぢも

二二五ノ三
二二五ノ二
一八五ノ一

れのひのまつも
れやのつまとや
れられぬいをも

一五八ノ三
二二七ノ二
二四七ノ五

ハ

はつれをあやな
はてはけぶりも
はなちりてこそ
はなにさきだつ
はなにわかれぬ
はなのいろにぞ
はなのこころは
はなのさかりに
はなのしたにて
はなははるとも
はなみるひとに
ははそのもりの
はまなのほしに
はるさへはれぬ
はるにしられぬ
はるのゆくとも

一五七ノ四
二四八ノ一
一六四ノ二
二二八ノ三
二二七ノ三
一七二ノ二
二三五ノ二
一六三ノ四
一六三ノ三
一六三ノ三
二二八ノ二
二四四ノ三
二四三ノ一
一五八ノ一
二二七ノ二
一六三ノ一

ひくしらいとの

一七〇ノ五

ヒ

ひとこゑなげば
ひとづてならで
ひとのこころを(命)
ひとのこころを(盡き)
ひとばゆくへも
ひとよりしもに
ひとりばぬべき
ひとりやわれは
ひとをこひしと
ひとをわする(心)
ひとをわする(事)
ひとをわする(身)
ひばりのとこそ
ひるはきえつつ
ひをのよるさへ

一七〇ノ一
二〇〇ノ一
二二三ノ二
二〇四ノ一
二〇九ノ五
二四三ノ二
二二三ノ一
二二七ノ一
二二五ノ六
二二五ノ五
二二六ノ一
一八六ノ二
二〇六ノ一
一八四ノ五

フ

ふかきにまけぬ
ふかくもはるの
ふきなみだりそ
ふじのたかれの

二三〇ノ二
一六五ノ五
一五九ノ五
一八九ノ二

ふたたびくべき
ふたたびすめる
ふたつにわくる
ふままくをしき
ふりはつるまで
ふるかひもなき
ふるにかひなき

二二六ノ一
二四六ノ一
二二一ノ一
一八九ノ四
一六五ノ一
二二三ノ三
一八七ノ六

ホ

ほのかにけさぞ
ほのみしまえの

一七四ノ一
二二七ノ一

マ

またこりすまに
まだとどこほる
またぬれざめの
まだふるものは
またもやはるに
まだよをこめて
またわれならぬ
まづくるひとに

二〇三ノ五
二四三ノ三
一七〇ノ二
一八四ノ三
二二九ノ四
二〇九ノ二
二二〇ノ四
二四六ノ二

ミ

まつこころこそ
まつこころにや
まつこそはなの
まつこともなき
まつとはたれに
まつにひかるる
まつべきみこそ
まつもいくたび

一六九ノ二
二四三ノ四
一六二ノ六
一六九ノ三
二三四ノ二
一五八ノ四
一九四ノ四
一九三ノ五

みえぬやみづの
みかきがはらは
みさへくちぬる
みなしらくもと
みにしむばかり
みにはなみだの
みれにあさひの
みれのつづきの
みやこのひとも
みやこははれぬ
みればのごとに

一七〇ノ三
一五七ノ三
二五〇ノ一
一六〇ノ三
一七九ノ三
二二二ノ一
一九九ノ一
一九九ノ二
一六九ノ五
一九五ノ一
一八〇ノ三

ム

みわかぬほどに
むかしをしのぶ
むしのれきくぞ
むすぼほらむ
むろのやしまの

二二九ノ三
一七二ノ一
一八一ノ三
一五九ノ六
一九八ノ二

メ

めにめづらしき

一八八ノ五

モ

ものおもふそでは

二〇五ノ一

ヤ

やがてしられぬ
やがてなきよも
やがてゆきげの
やせのなみぞ
やどばあらして
やどれるつきの

一九八ノ三
二五〇ノ二
一八八ノ四
一七一ノ一
二二三ノ二
一七八ノ五

やなせのさなみ
やへかさなれる
やみにまどへる

一七三ノ三
一六五ノ六
二五三ノ二

ユ

ゆきのきえまに
ゆきふみわけて(越えむ)
ゆきふみわけて(夜な)
ゆくとやいほむ
ゆくらむかたを
ゆふかくるまで
ゆふかけてのみ
ゆめにもひとの
ゆゆしとやみむ

一五八ノ二
二四〇ノ二
三三九ノ二
一八〇ノ一
二二六ノ三
一八〇ノ二
一六九ノ一
一九九ノ四
一七五ノ一

ヨ

よしののやまの
よにはふるさで
よのうきめより
よるなくむしの
よをながつきの

一六二ノ二
一六九ノ四
二四三ノ一
一八二ノ二
一九四ノ三

ワ

わがこころこそ
わがつまをこそ
わかのうらとぞ
わかへむとしな
わがみひとつも
わがやどからの
わがやどのみぞ
わたりにのみや
われさへわれに
われてもすゑに
われならざらむ
われのみひとを
われもしぐるる
われもなにゆゑ
われをわするる

二五二ノ一
一八二ノ三
二二〇ノ二
二二二ノ三
二二六ノ二
二二四ノ二
二四一ノ五
二一九ノ三
一九六ノ一
二〇六ノ五
二二一ノ五
二二二ノ二
二二八ノ一
二二五ノ四

ヲ

をさまれるよの
をしみもあへず

二四五ノ三
一七三ノ二

をるべきはるぞ

一九一ノ四

詞花和歌集索引 終

千載和歌集索引

(上句の頭五言及び下句の頭七言を採り、
歴史的假名遣により五十音順に排列す)

ア 上句五言

あかつきに
あかつきの(嵐に)
あかつきの(れざめに)
あかつきを
あかでいらむ
あかでゆく
あかなくに(袖に)
あかなくに(散り)
あかなくに(又も)
あきかぜの
あきかぜは
あきかぜや
あききぬと
あきくれば(秋の)

三四二ノ四
四九九ノ二
三三九ノ五
五三六ノ二
四六七ノ四
二八六ノ三
二七三ノ三
二七八ノ二
四六六ノ一
四四〇ノ一
三〇二ノ一
三〇四ノ五
三〇六ノ四
五二四ノ三

千載集索引

上句五言

ア

あきくれば(おもひ)
あきくれば(宿に)
あきたつと
あきのくる
あきのつき
あきのの
あきのの
あきのの
あきのよの
あきのよは(おなじ)
あきのよは(松を)
あきのよや
あきのよを
あきはきぬ
あきはきり
あきはつる
あきはをし
あきやまの

三〇六ノ一
三〇八ノ五
三〇三ノ一
三〇三ノ三
三二二ノ一
五二二ノ四
三〇九ノ五
三二一ノ六
三二九ノ五
三二八ノ三
三二四ノ四
四五四ノ三
三〇四ノ一
五二二ノ五
四八七ノ二
四二二ノ三
三〇七ノ二

あきをへて
あさぢばら
あさぢふの
あさつゆを
あさでほす
あさどあけて
あさぼらけ
あさましや(おさふる)
あさましや(さのみは)
あさまだき(露を)
あさまだき(御法)
あさゆふに(花まつ)
あさゆふに(みるめ)
あさりせし
あしがもの
あしたづに
あしたづの(霞を)

四六三ノ一
三二六ノ二
三〇三ノ二
五四四ノ四
四三三ノ二
三四四ノ五
三四〇ノ二
四〇三ノ一
四三七ノ四
四〇八ノ二
五二八ノ二
二六七ノ二
四三三ノ六
二九九ノ二
三四三ノ三
四七四ノ四
五〇二ノ一

五八三

あしたづの(雲路)	五〇一ノ三	あはれにも(暮れ)	三四九ノ二	あまのばら(すめる)	四六五ノ一
あしのやの	四三九ノ四	あはれにも(みさを)	二九九ノ一	あまのばら(そらゆく)	四六三ノ四
あしびきの	四六九ノ六	あひみむと(いひ渡り)	四三五ノ二	あめつちの	三九二ノ一
あすしらぬ	四九五ノ三	あひみむと(思ひし)	四五九ノ三	あめのした	五三二ノ二
あすもこむ	三三三ノ二	あひみむと(思ひな)	四二〇ノ一	あやしきは	二八九ノ四
あたらふを	三五七ノ三	あふことの(ありし)	四四〇ノ六	あやしくも	五一三ノ二
あたりさへ	三〇〇ノ一	あふことの(かく)	四二五ノ四	あやめぐさ(うきれ)	三七五ノ一
あぢきなく	四三〇ノ五	あふことの(なげき)	五二五ノ六	あやめぐさ(涙の)	三七〇ノ二
あづまぢの(野嶋が崎)	五二〇ノ二	あふことば(引佐)	四三七ノ二	あらいその	三九五ノ四
あづまぢの(やへの霞)	五〇九ノ一	あふことば(身を)	四四三ノ四	あらしふく(志賀)	二七六ノ四
あづまぢも	三六六ノ一	あふことを(さりとも)	四二二ノ五	あらしふく(比良)	三三八ノ四
あづまやの(あさき)	四二七ノ一	あふことを(その年月)	四〇七ノ三	あられも	三六五ノ四
あづまやの(ながや)	四三六ノ四	あふさかの(せき)	三六二ノ二	ありあけの(月見)	四四五ノ四
あたとえて(とふべき)	五二二ノ三	あふさかの(名を)	四三九ノ二	ありあけの(月も)	三五七ノ一
あたとえて(世を)	四九〇ノ四	あふさかの(やま)	二九六ノ五		
あともたえ	三四七ノ一	あふとみし	四三九ノ六		
あはれてふ	四八四ノ六	あふならぬ	四一一ノ四		
あはれとし	三五四ノ二	あふひぐさ	二八八ノ三		
あはれとも(誰かは)	四八八ノ一	あまたたび	四七九ノ三		
あはれとも(枕)	四二二ノ一	あまつそら	二六六ノ四		
あはれなる	三六三ノ六	あまのかは	三〇五ノ六		

いかなれば(流は)	四二二ノ二	いたづらに(しをる)	四二七ノ一	いとほる(身を)	四三〇ノ四
いかなれば(春を)	二八二ノ九	いたづらに(ふりぬる)	五三三ノ二	いとひても	四九五ノ一
いかにして(過ぎにし)	四五九ノ一	いたびさし	五五三ノ三	いなりやま	五一三ノ一
いかにして(よるの心)	四三三ノ一	いづかたに(にほひ)	二八二ノ二	いにしへに	四七九ノ一
いかにせむ(いせの)	四八六ノ二	いづかたに(花)	二六七ノ三	いにしへの	五三七ノ三
いかにせむ(思ひ)	三九四ノ三	いづかたの	三七三ノ三	いにしへの	四八八ノ四
いかにせむ(さらで)	四六七ノ五	いづくにか(月は)	四三三ノ五	いにしへの	四四七ノ一
いかにせむ(忍ぶ)	四〇三ノ四	いづくにか(身を)	四九三ノ三	いにしへの(底)	四八四ノ五
いかにせむ(御垣)	三九八ノ三	いづくにて	四八三ノ一	いにしへの	二九七ノ一
いかにせむ(室の)	四〇四ノ五	いづくより	四三〇ノ一	いのちあらば(いか様)	四八七ノ四
いかにせむ(思ふ)	四〇八ノ五	いづことも	四九四ノ四	いのちあらば(また)	二八三ノ二
いかにせむ(戀路)	四〇九ノ五	いづことも	三二二ノ三	いのちこそ	四三二ノ一
いかりおるす	四七五ノ三	いづしごと	四〇二ノ五	いのちをば	四二二ノ二
いくかへり	二八四ノ一	いづしごと	四八四ノ四	いはこゆる	三四二ノ三
いくちよと(限らざり)	三八四ノ一	いつとて	三〇二ノ五	いはそそぐ	五三六ノ三
いくちよと(限らぬ)	三八九ノ二	いつとなく	五三三ノ四	いはたたく	四九六ノ二
いけみづに	二七四ノ二	いつもかく	三六四ノ四	いはねふみ	三〇二ノ二
いけもふり	五二一ノ五	いとどし(しづ)	三二二ノ四	いはばしる	三六六ノ二
いさぎよき	五三三ノ三	いとどし(昔)	二九四ノ三	いはまもる	三三三ノ五
いせしまや	四四二ノ六	いとほる(その)	五二四ノ一	いはまゆく(やま)	三〇〇ノ四
いそがくれ	四二二ノ五		四五一ノ四		三九五ノ五

いはまゆく(みたらし)	三五ノ四	うたたれの(夢や)	三三八ノ一
いばまより	三〇二ノ三	うちならず	三七六ノ一
いまさらに	四四二ノ四	うつつとも(思ひ)	三七三ノ三
いましてし	四二八ノ五	うつつとも(夢とも)	三六九ノ二
いませさほ	四二〇ノ三	うつつをも	四九四ノ六
いませしも	三一ノ三	うづらなく	四三六ノ一
いまはただ(いけらぬ)	四八六ノ一	うつりがに	四四一ノ一
いまはただ(おさふる)	四二二ノ三	うのはなの(かきれ)	二八八ノ一
いまはとて(入り)	四八〇ノ一	うのはなの(よそめ)	二八七ノ五
いまはとて(かきなす)	四九七ノ五	うのはなよ	五三三ノ四
いまままでに	五三四ノ一	うはごほり	四五七ノ一
いまよりば(梅)	二六三ノ一	うめがえに(心)	二六二ノ三
いまよりば(更け)	四六五ノ五	うめがえに(降り)	二六二ノ四
いもがあたり	四二六ノ三	うめがえの	二六四ノ四
いもがりと	三四一ノ一	うめがかに(おどろ)	二六三ノ四
いとねて	四八八ノ一	うめがかに(聲)	二六四ノ三
いりぬるか	三八〇ノ二	うめがかは	二六四ノ二
いりひさす	二八三ノ五	うめのはな	二六三ノ三
いるつきを	五九ノ四	うらづたふ	三六〇ノ四
いるみえぬ	四〇二ノ一	うらみける	五二七ノ四
		うらみずば	四四七ノ四

ウ

うらむべき	四五ノ二	おしなべて(山の)	三四五ノ六
うらめしや	四二ノ二	おしなべて(雪の)	五三三ノ一
うらやまし	二六ノ四	おそろしや	五六ノ二
うれしくぞ	五二ノ三	おちたぎつ	三八六ノ三
うれしくほ	四〇六ノ三	おちにきと	五二五ノ一
うれしくも	五三ノ三	おつれども	四〇一ノ五
うれしさを(かへす)	五〇一ノ一	おとにさへ	三三三ノ二
うれしさを(よその)	五〇一ノ二	おとにのみ	四七四ノ六
うゑおきし	三六八ノ一	おどろかぬ	五三六ノ一
うゑてみる	三八四ノ二	おなじくば	四〇三ノ三
		おなじとし	四八九ノ一
		おのづから(あれば)	四九一ノ六
		おのづから(つらき)	四二七ノ四
		おほかたに	三七二ノ三
		おほかたの(秋)	三三六ノ五
		おほかたの(戀)	三九五ノ一
		おほかたの(露)	三二〇ノ四
		おほけなく	四九六ノ五
		おほぞらの	五九ノ一
		おぼつかない(いかに)	三六一ノ二
		おぼつかない(いつか)	二九四ノ四
		おぼつかない(うるま)	三九六ノ二
		おほろがは	四九八ノ一
		おもひあまり(うちぬる)	四二五ノ五
		おもひあまり(人に)	四〇五ノ一
		おもひいづる	四〇四ノ三
		おもひいでて	四三四ノ一
		おもひいでよ	四四九ノ三
		おもひかれ(あくがれ)	四九三ノ五
		おもひかれ(きのふ)	三六九ノ一
		おもひかれ(越ゆる)	四三九ノ五
		おもひかれ(なほ)	四四一ノ三
		おもひかれ(夢に)	四三〇ノ二
		おもひきや(うかりし)	四四三ノ一
		おもひきや(今日)	三八一ノ一
		おもひきや(志賀)	四九三ノ三
		おもひきや(楊の)	四一九ノ二
		おもひきや(年の)	四三八ノ二
		おもひきや(夢を)	四一五ノ二
		おもひぐま	三三四ノ二
		おもひしる	四五一ノ一
		おもひせく	四一七ノ三

おもひでの
おもひとく
おもひれの(夢だに)
おもひれの(夢に)
おもひやる
おもひやれ(とよ)
おもひやれ(ならばぬ)
おもひやれ(むなしき)
おもひわび
おもふこと(ありあけ)
おもふこと(いは間)
おもふこと(くみて)
おもふこと(忍ぶ)
おもふこと(千枝にや)
おもふこと(なき身)
おもふこと(なくてや春)
おもふこと(なくてや見)
おもふより
おもふをも
おもへただ
おもへども(いはで忍ぶ)

四九一ノ一
五三六ノ三
四一六ノ五
四四三ノ五
二九〇ノ三
四八五ノ二
四九九ノ一
三七五ノ二
四三八ノ二
四九九ノ五
三九六ノ一
五二一ノ一
四二一ノ三
二八〇ノ二
二九一ノ一
四八一ノ二
三五八ノ四
三九四ノ一
四四一ノ二
四六ノ一
三九七ノ三

おもへども(いはでの山)
かがみやま
かかりける(歎)
かかりける(涙)
かきくらし
かきたえし
かぎりあらむ
かぎりありて(人ば)
かぎりありて(二重)
かくしつづ
かくてだに
かくばかり(色)
かくばかり(憂身の程)
かくばかり(憂身なれ)
かくばかり(憂世の末)
かくばかり(憂世の中)
かくばかり(憂世の中を)
かくまでば
かぎきよき

三九五ノ二
二七九ノ五
四一六ノ一
四〇六ノ一
三四八ノ六
五〇九ノ三
三五三ノ一
三七六ノ二
三七九ノ四
三六五ノ一
四八〇ノ五
四〇一ノ二
三六五ノ五
四九三ノ二
四八二ノ二
四六四ノ三
四九三ノ四
三六一ノ四
二六七ノ五

かざごしを
かすがのの
かすがやま
かすならで(年)
かすならで(心)
かすならぬ(身には)
かすならぬ(身にも)
かすならぬ(身を)
かすみしく
かぜにちる
かぜのおとに
かぜわたる
かぞふれば(昔)
かぞふれば(八年)
かぞへしる
かたみにや
かつらぎや(たかま)
かつらぎや(渡し)
かなしさに
かなしきは
かなしさを(かつは)

二九〇ノ五
二六二ノ一
四八四ノ一
四八四ノ三
四八七ノ五
三四九ノ三
四二八ノ三
四八五ノ一
二六〇ノ四
二九三ノ三
三六二ノ五
二六四ノ五
三七八ノ一
五三三ノ一
四五六ノ一
三四二ノ一
二七〇ノ二
四七五ノ二
三七一ノ四
三七二ノ二
三七一ノ一

かなしさを(これ)
かねてより
かばりゆく
かへりこむ(程も)
かへりこむ(程を)
かへりつる
かへりても
かへるかり
かへるさを
かみうくる
かみがきの
かみにおける
かみやまの(麓)
かみやまの(松)
かみより(つもり)
かみより(ひさし)
かものゐる
からくんに
からころも
かりころも
かりにぞと

三七六ノ四
四三三ノ五
四五〇ノ一
三五二ノ一
三五二ノ四
四三三ノ一
五三三ノ四
二六八ノ三
二六六ノ五
二六八ノ三
五三七ノ四
二七〇ノ四
五七〇ノ三
二八八ノ四
三〇四ノ三
五三二ノ四
三八六ノ二
三四三ノ一
四七一ノ四
四四三ノ二
三五九ノ四
四四七ノ二

かりにだに
かりびとは
かればつる
かやくよも
かをるかに
かをるかの
きぎすなく
きのふまで
きのふみし
きぶねがば
きみがたぬ
きみがなぞ
きみがよに
きみがよの
きみがよは
きみがよを
きみこふと
きみこふる(心)
きみこふる(涙)

二六九ノ五
四四六ノ三
四九一ノ一
三七七ノ三
四六〇ノ二
二六二ノ五
二八〇ノ四
四六〇ノ三
四六二ノ一
五三五ノ二
三八五ノ三
三九〇ノ四
三九一ノ四
三八五ノ二
三八七ノ三
四四九ノ五
四四九ノ六
四〇二ノ三

きみこふる(身)
きみにのみ
きみやあらぬ
きみやそれ
きみをいのる
きゆるをや
きよくすむ
くさきまで
くさまくら(同じ)
くさまくら(かりれ)
くちなしの(色)
くちなしの(園)
くちばつる
くちばてて
くまもなき
くものうへの
くものうへも
くらぬやま
くりかへし

三九六ノ五
四三八ノ一
四五〇ノ二
四二六ノ四
五三五ノ一
三四五ノ二
五二八ノ四
三〇九ノ六
三六三ノ三
三六一ノ三
二八一ノ四
三六八ノ三
五三三ノ四
五二七ノ三
三二二ノ五
四七九ノ二
四九三ノ二
四八三ノ四
四三〇ノ三